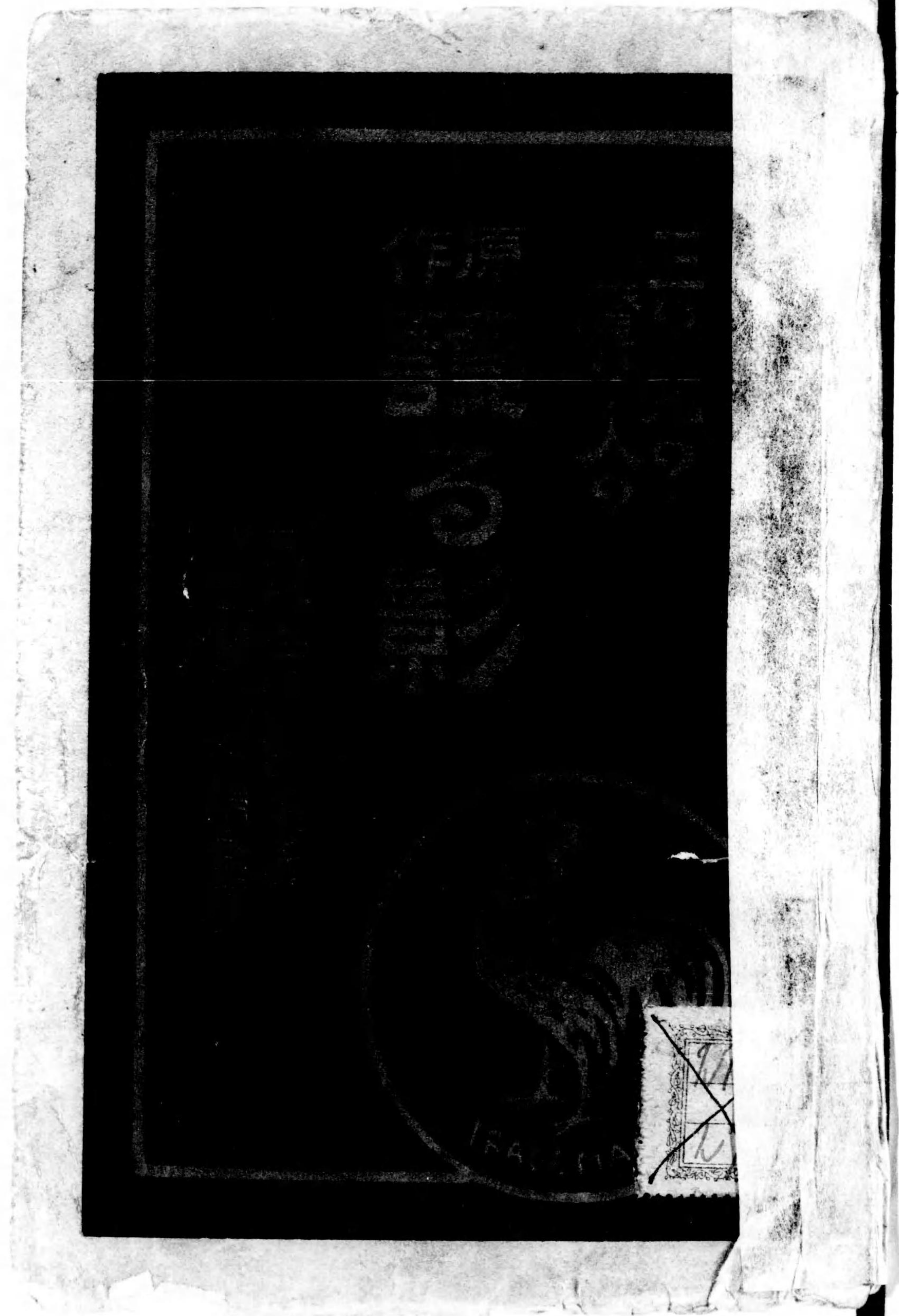
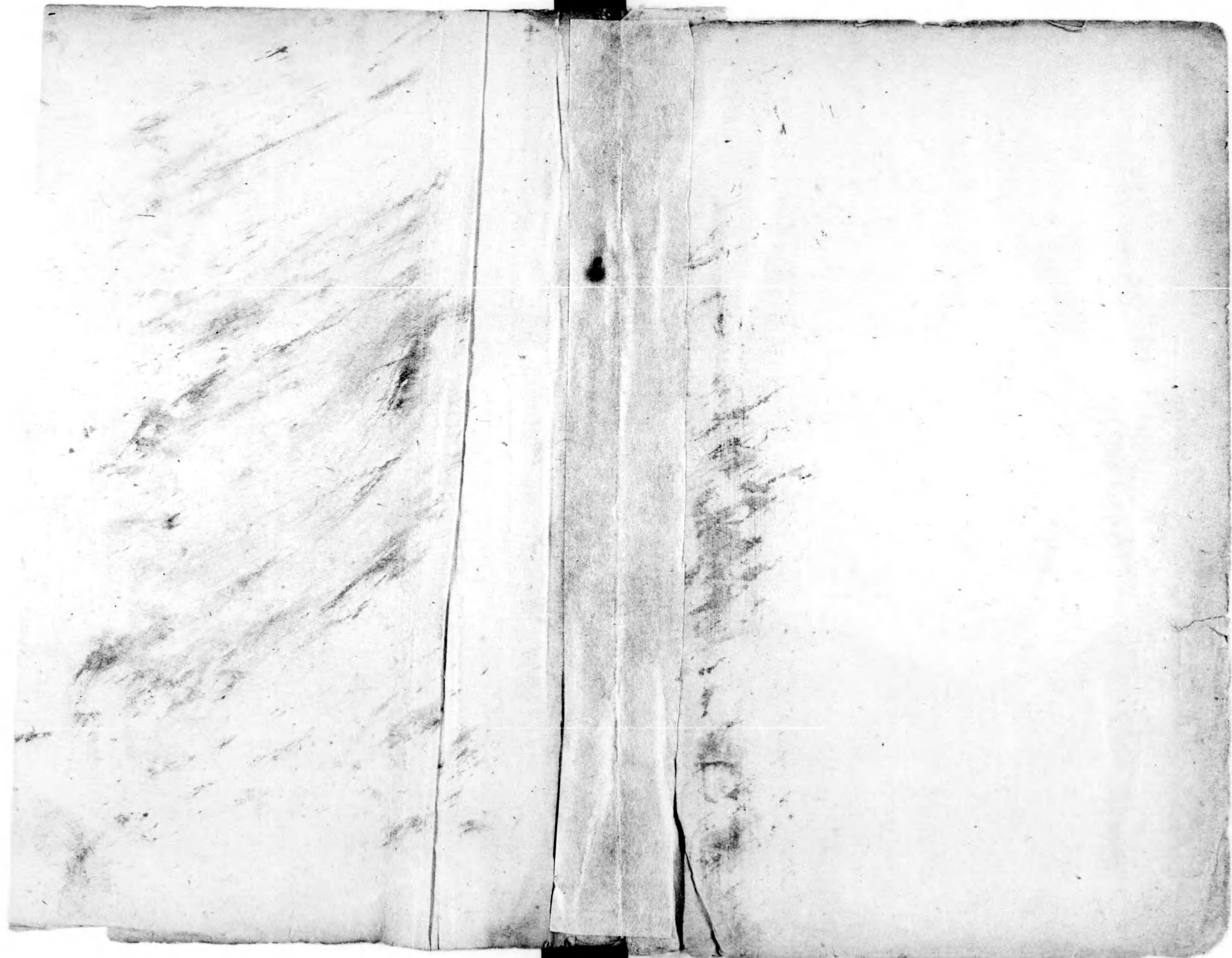


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
m

始







特102
83



護

る

影

大正
6. 5. 21
内交

魔人? ? 護る影目次

第一篇 探検船の運命

第二篇 無人島上の白骨

第三篇 天涯の怪客

第四篇 寶の山

第五篇 魔窟の女王

第六篇 超自然の力

第七篇 空の謎

一八二

一九九

二二三

二九七

三〇七

三三八

大正 6. 5. 21 内交

第八篇	世のどん底	………	二六
第九篇	地下水道	………	二四六
第十篇	隠れマント	………	二八三
第十一篇	ピアンカの死	………	三二七
第十二篇	魔力の泉源	………	三五七
第十三篇	ラヴェンガの本態	………	三九三
第十四篇	絶對的黑色	………	四三七
第十五篇	大團圓	………	四六一

— 目次終 —





554



THE SHIELDING SHADOW COMMANDS.



魔人？

護る影

米國ラダンバルリツユシ氏原作

日本活社會編輯局譯述



第一篇 探検船の運命

第一卷 盡させぬ名残

椰子の實みのる南米の濱——アルゼンチンなるデルガドの港は熱帯の日を浴びて町は眞晝にも係らず、恰も眞夜中の様に静まり返つて居る。家々の白い羽目板が強い日光を反射して、南米特有の限りも知れぬ廣い草原の中を走る蛇々たる道も火を吐かん許りに焼けて居る。窓の鎧戸は堅く鎖されて、町を通る人影もない、只動くものとしては波止場に働いて居る小数の漁夫あるのみだ。波止場には亞米利加製の小綺麗なボートランド、ガール號(乙女號)が横付けになつて居る。甲板上に立つて居る一人の少女は萬縁叢中紅一點とでも云ひ度いが澄み渡つた碧空中句一點の美を示して居る。

彼の女の傍に立つて居る一青年は、瞬きもせず女顔を見詰めた。彼の胸中には今別れに望んで相思の愛情の更に切なるものがあつた。

相愛の男女の訣別ほど情ないものが又とあろうか。今此の二人は方にそれに際會して居るのだ。少女は名をレオティン、ウォールコツトと云つて、アルゼンチンの此の小港に移住し來つた米國の實業家の一人娘で、今其の愛人の前代未聞の探検の旅程に上るを見送つて來たのである。

レオティンの愛人ジャリー、カーゾンは著名なる亞米利加の文學者で、レオティンとは二年前本國で商用を帯びた父と共に彼女が來た時に交際した事がある。

ジャリーは航海好きな男で、數ヶ月前バハマス地方で小説材料を蒐集して居つた節、偶然にも一發見を得た。それで其の發見を遂ぐる爲めに彼は此の乙女號を借りて、探險の途上デルガドの港に立寄つたのである。

「妾は毎日、海を眺めて、寶を積んで歸つて來る貴君の船を待つて居ますわ」と少女は靜かに云ふた。耳を傾けて居つた青年は此の時堅く手を握つて

「貴女は私を信じて下さる、此の世界で私を信じて呉れるのは貴女許りだ。世間の奴は皆私を大馬鹿と呼んで居る。私の船長さへ私を馬鹿と思ふて居る……そして貴女のお父さんさへ……」

これまで云ふて、青年は少女の顔を見た。

少女は何氣なく笑ふて云ふた

「私のお父さんは實業家ですもの、貴君のお考へを信用されないのは當然ですわ」
「お父さんは他の人の様に私を馬鹿者だと云ふてお出でですか」

「チヤリーさんお父さんは貴君の御計書には全然不賛成で居らつしやる、けれども夫れが何です。私が貴君を信じて居る以上はよいではありませんか」

徹頭徹尾彼女が自分を信じて呉れるのを見て、青年の顔から陰鬱な影が消えて、

喜びの光が見えた。

「一寸聞くと法螺話の様だが、私がバハマスの濱で拾ふた秘密の手書に入つた瓶は本物に違ひない。其の手書にはシヨセフ、デツキスターと署名してあつた。貴女は此のデツキスターといふ人の事を聞いた事がありますか」

「イ、エ、シヤリーさん」と、レオンティンは瞭然と答へた。

「デツキスターは當時の偉い人物でした。世間から妄想狂だなど、悪口されたけれども、彼の所説は事實として現はるゝ事も屢々で一部の人の人から一流の綜合化學者として認められて居つた。彼の敵さへも、彼を一騎當千の智者たるを許したが、彼の缺點は其の實用の才能を缺いて居つた事である、此の評は恐らく事實であつたでせう。併し、彼は其の後行衛不明となりました」

「デツキスターが行衛不明ですつて？」

「そう、もう九年か十年も前の話です、貴女は御存じないかも知れないが其の頃は

大評判でした。彼は丁度今私がする様に船を借りて南太平洋の探険の途に就いたが不幸、難波して、其の後の消息は少しも知れませんでした。とうとう死んだものとして、彼の遺志が検認せられ總て其の儘に終りを告げました。所が不思議にも彼の手書が私の手に這入つて、又々其の事件が蘇生つた譯なんです」

「まさか誰かど瞞す計略なんじやないでしやうね」と、疑はしげにレオンテインは問ふた。

「イヤ決してそんな事はありません。彼の署名の本物である事は常々交際して居つた友人が證明してます。併し不思議ぢやありませんか、其の友人は手書其の物の重大なる事を少しも氣が注かん様でした。兎角化學者なんてものは、理窟一片で、彼の手書を狂人の寢言とでも思つて居つたのでせう。然し手書の示す事は、斷じて事實です」

「だが、シヤリーさん、ヘンリー、モルガン郷の遺寶を搜索に行つた人は随分澤山

あるんじやありませんか」と、彼女は云つた

「皆な失敗に終りました、併しデツキスターは儲かに、寶を發見しました、南大西洋の「狂神巖」と名付くる一孤島に在る事を明かに彼の手書中に書いて居る。全く永久發見せらるべき運命でなかつた寶が發見せらるゝ事となつたんです」

レオンテインはヂヤリーの腕を堅く握つて

「私のお父さんや、世間の人の云ふ事なんか決して氣に掛けないで探険を遂げて下さい。私は貴君の成功を信じて居ります、どうか成功の曉には其の巨萬の寶を持つて無事に歸つて来て下さい……そして私と結婚を……」と流石少女の恥かしげに伏目になつた、ヂヤリーは一步前へ進んで、船員等の手前もかまわず少女を抱き締めた。彼は更に懐かしげに陸の方や、海の方を眺めて、永久に此の思出多き印象を頭に刻み付けんとした。此の瞬間には前途に横はる幾多の困難もなかつた。併し彼の再びレオンテインの手を握る時は果して何時であらう。

「所でセヴァスチアン、ナヴァロの方はどうなすつたんですか」
「私とは全く無関係ですわ」

「それは事実ですか」と、ジツと少女を凝視めて更に問ふた
「事実ですわ」と、少女は斷乎として云ふた

此の言葉を聞くやデヤリーの顔から疑の雲が消え去つた

「チャ、レオンテインさん、愈々お別れです、私の歸つて結婚するまで、何卒お達者で……」

「貴君のお歸りまでは、何時までもく待つて居りますわ……いつも貴君の事を忘れずに……」

第二巻 船火事

「大事だ」

甘い夢路を辿つて居つたデヤリーの耳に突然此の叫び聲が這入つた。併し未だそれが夢であるか現であるか判然意識する事が出来ない。彼はレオンテインとデルガドの港へ歸つた所がレオンテインの、行衛が判らぬので、それを捜して居ると「最後の審判」の日が來て、空よりは星が降り、地よりは火の柱が立つて、やがてレオンテインの姿は其の中に没し去つたと見て居ると……再び恐ろしい呼び聲が聞えた、ハツと思ふて寢臺から飛び起きた時には、室は一面の烟で呼吸も困難に感じた甲板の上には、右往左往する人の足音が響いて、叫聲はダン／＼細く幽かになる様な氣がした、彼は衣服を着くるや否や、船室から甲板へ飛び出した、船の燃える一種異様の臭氣が鼻を衝いて、濃い烟の渦が彼を昏倒せしめんとした。彼は蹠踉として再び船室に引き返さうとしたけれども、船室も既に烟の占領する所となつて居るので已を得ず寢臺から毛布を取つて水に浸し頭に捲き付けて更に黒烟渦巻く甲板上へ上つて來た、硫黄を含んだ烟が彼を窒息せしめんとして、彼は毛布の間から辛う

じて呼吸を續けて居つた、彼が甲板の上に馳せ寄つた時には、船の後半部は既に猛火の骨め盡す所となつて、救ふべき手段は絶える。遙かに陸の方を眺むれば、一帯の丘地は以て掩はれ目を遮る草木とともない。これぞ上部バタゴニア地方の不毛の蕃地とは知られる。陸に向つて今一艘のボートは急いで漕いで行く。波は高く低くボートを揺つた。彼は間もなく自分獨り船に取り残された事に気が付いた。卑怯なる水夫等は火災の起るや、ボートを卸して逃げたのである、彼は先程の夢から全く醒めないで、何が何やら合點が行く間もないのに、人影が烟の中から浮いて來るのを認めた、それは餘人ではない矢張り取残された船長其の人であつた。地獄で佛とは此の事であらう。彼は船長が忠實にも船と運命を共にするを見て狂奔した、幸ひにして船側から波の上に擦れくりに下つて居つた、幸ひにして波に揉まれながらも無事であつた此の危急の際にも、ヂヤリーは乗組員の乗つて逃れたボートを見たどうした機か、其のボートは忽然として姿を没して、間もなく救を呼ぶ叫喚の聲が

聞えた。その音も暫時の間で海面はやがて元の寂寞に歸つた、危険は刻々に迫つて來た。焔の舌は船艙から吹き出してヂヤリーを甜めんとして來た。彼は此の變事に狂亂せる船長の腕を執つて、ボートの方へ連れて行かうとした。けれ共船長は首を振つて、何か口の中で咄くのみであつた、彼は益々焦つて船長をボートに連れて行かうとした。船長は飛鳥の如く身を翻して梯子から船室の方へ下りて行つた。彼は之を追ふて行かうとしたけれども、猛烈なる烟の湯が彼を窒息せしめんとして、どうしても進む事が出來ず、巨船の底の方に兩腕を擴げて突立つて居る船長の姿を烟の裡に認むるのみであつた。船長は全く狂氣になつたのだ。丁度烟を海の波とでも思つたのか、泳ぐ様な手振りをして居るのである。

ヂヤリーは更に船長を追ふて下つた。船長は更に海底の方へ行つた。大きな柱が其の瞬間に焼け落ちて彼の傍らに倒れた。船長の黒い姿と、赤い焔とがヂヤリーの眼に映じたのみだ。船長は永久に没したであらうか、今は只自身を救ふより外途は

ない、而もこれが命掛けの仕事だ、ヂヤリーは蹠蹠として甲板へ上つて来て、漸くの事でボートの吊つてある所に来て、繩に縋つて乗り移り、手早くナイフを取り出して一本の繫索を斷つた、此の時船は火炎に包まれて、船側の穴から煙が吹き出して居つた。ボートは波に揺られて、今一本の繫索の爲め船首は波に突き入つて居る、彼は死物狂ひで之を斷ち、漸くの事で漕ぎ出した。其の刹那火の舌は船の穴から吹き出して、彼の髪はジリジリと焦げた。波は漸く高くなつて来た、彼は死力を盡してオールを握り陸を見かけて漕ぎ出した。舟は少く、波は高い、然し人間の一心程恐ろしいものはない。彼は大海の一葦に比すべき此の一小ボートに依つて辛ふじて焼死と溺死とを免れたのである。一難去つて一難來る。これが人生の常例である。彼は火と水との災厄を免れて更に恐るべき熱帯の太陽に曝らさるべき運命に迫られたのである。太陽は水平線を離れて其の威力を逞しふし始めて来た、此の時、凄壯なる音響を發すると共に本船は二つに折れ濛々たる黒煙の漲ると共に、火煙は小旗

の如くヒラ／＼と空に舞ふた。悲絶とも壯絶とも之を顯はす言葉はない。黒煙はやがて二つに別れ、小旗の如き火の舌も、底深き大洋の呑む所となつて、茲に美しくりし帆船も最後を遂げ残るは只永却に空搏つ波の姿のみである、幸ひにして浪は稍静まつた。ヂヤリーは満身の力をオールに集めて、陸の方へと漕いだ。幸ひに潮に乗つたものだから、正午頃までは陸に達する見込が立つたのである。ヂヤリーは偶然波に漂ふ海豹の頭の様なものを認めた。拾ふて見ると、それは先刻轉覆したボートの水樽で未だ口の切つてないものと知れた。彼は何となしに前途の光明を胸に宿した。あれ丈の乗組員中無事なるは自分只一人であると云ふ事が神の攝理でなくして又何と信じられやう。其の日の午後遅く、彼が陸の岩に着いた時には彼の力は既に／＼盡き果て匍匐が如くにして波打際に上り、其所に倒れて、華胥の國ならぬデルガドの彼女の許に遊んだ、此と同時にデルガドの港の濱邊に立つて、レオンティンは彼女の愛人の無事歸船を神に向つて祈つて居つた。

第三卷 死人を待つ娘

チャリリーがデルガドの港を出帆してより五ヶ月の日子は経過した。此の間レオンテインの身邊には色々困難な事柄が付き纏ふて来た、レオンテインの父は、一度は此の港に於て屈指の貿易商として榮えたのに、榮拓盛衰の習ひに洩れず、持船の沈没した爲め保険を付けなかつた荷物の損失を始めとして、爲す事、する事失敗に歸し、盛んな時に儲かつた賭博もけちが付いてから負け續きとなつた。こうなると今迄諛らつた人達も、輕侮の眼を以て彼を見、友人は日に去つて、債鬼は門に集る様になつた、彼が自宅から事務所へ通ふ道すがら、行く人は彼に唾せん許りな哀れな體裁となつて来た。チャリリーに懸想して居つた、セヴァステアン、ナワテロは、父の繁榮時代にこそ、レオンテインに敬意を以て交際したれ、失敗するに及んで、敬意は變じて耽溺の情となつて来た、併しレオンテインは只普通の交際をするのみで

あつた、シヨン、ウクルコツトは若い時分には随分無銃砲な事を遣つて来たが、老年に及んで娘の將來を深く考へる様に成つて性格が大に變じて来た、若し娘を小説家の様な貧乏商賣の者に呉れるならば、娘の將來のみならず、自分自身も此の窺境を回復する事は出来ぬ。こんな關係で彼はチャリリーを好まなかつた。更に又彼は亞米利加が生れでも、今はアルゼンチンに永住して、殆んど土着の人と異ならず、アルデンチンの風俗習慣は彼の最も好む所となつたのである。そして彼はアルゼンチン風のセヴァステアン、ナヴァアロを愛した、セヴァステアンは此の港を十哩隔つた内地に、其の弟デイゴと共に農園を經營して居つた。其の農園といふのはウエールス一洲の大きさにも比すべき大きなもので、何萬とも知れぬ牛馬羊豚が群れをなして、其の資産と生活とは王侯と雖も及ばぬ位であつた。悠暢にして且つ豊富な農園の生活、これこそ、ウオルコツトの老後を養ふべき理想の生活なれ、而して彼は娘に依つて其の理想を實現せしむべき事は決して不可能の事ではなかつた。更

に又、彼はセヴァスチアンに娘を遣れば、現に苦しみつゝある財政困難を恢復する途が立つ、而してセヴァスチアンの欲する所もウオルコットの望む所も互に一致し且つ黙解せられて居るのだ。只時機の到来を待つのみである、ヂヤリー、カーゾンに至りてはウオルコット親爺の最も好まぬ所である。ヂヤリーが探險の途上、デルガドの港に寄港して、彼の家に滞在した間、娘と睦じさうなのを見て、心頗る穩かならぬものがあつた。そうして此の時から、セヴァスチアンはレオンティンに對し不快の念を抱き、ヂヤリーは嫌惡の感を起した。然るに、ヂヤリーの出帆後ウオルコットは口を極めてセヴァスチアンを讚め、ヂヤリーを惡口し始めた。此の機に乗じて、セヴァスチアンは益々レオンティンに近付かんと努めたが、レオンティンは常に之を袖にして居つた。こんな周圍の迫害中に在つて、彼女の唯一の慰めは、愛人が必ず歸つて來るといふ信念であつた。レオンティンは世を厭ふ心さへ生じて來たのである。或る日の事、外出から歸つて來ると、レオンティンは父の室で一

人の水夫が何か話をして、父が熱心に之に耳を傾けて居るのを見た。側には此の頃此の家に入り侵りのセヴァスチアンも居つた。彼女が室に這入つて來る時に、セヴァスチアンはウオルコットの顔を氣味悪い目で睨んだ。ウオルコットは娘の肩に手を置いて、半ば憐れを乞ふものゝ如く

「お前には縁起の悪い話を耳に入れなければならん」

「何か起つたんですか」と彼女は目を見張つた

「誠にお氣の毒な事で」と水夫は躊躇しながら

「此報告をするのは、自分の務めであるんですから……何としても仕方ありません、乙女號は沈みまして……」

「斷じて嘘です」と、レオンティンは言い切つた、

「イ、エ嘘ではありません」と水夫は答へた

「今話した通り聞かせてお遣り」と、父は促した

水夫は重い口で

「お嬢様、こういふお話です。乙女號はアサンシアニ港で、水を積み入れる豫定でし
たけれども、一體船荷も船客もない船などといふものは兎角注意が足りないので其
の儘進みました」

「それからどうして？」と、少女は言葉を入れた

「ソレで私の船はブイノスアンシスから歸つて来たんですが、私共の船も全速力で
助けに向つたんですが、其の時は既に其の船は船火事の爲め沈んだ後の祭りだつた
んで仕方なし其の邊に浮いて居つた船道具など澤山拾つて来たんです、その沈んだ
船が乙女號なんです。拾ふた船道具には船客がチャンと書いてありました。そして
其の他にボートの道具で矢張り船客の書いてあつたのも拾ひました。其の現場から
一哩程離れる個所で、空ボートを一艘見付けました。此の二ツのボートで逃げたん
でせうけれども、乗組員一同海に陥つたものに違ひありません」

「ヤチリーさんに限つて死ぬ様な事はありません、あの方が死ねば必ず妾の心に響
きます」と、レオンティンは自信を以て言ひ放つた

此の數日間、父はセヴァスチアンと喋り合せて、娘を色々に説き付け居つたのだ
が、此の時語を進めて、

「レオンティンや、お前も家の手元の事も善く御存じの筈だね」

「善く存じて居りますわ」と氣のない返事。

「チャリー、カーゾンのさん死んだのは誠に氣の毒な事だが、世間には禍を轉じ
て福とするといふ事もあるから……一つ、福に轉ずるといふ意味は、皆神様
の攝理ですぞ。お前ももう空想に許り耽つて居る齡ではありません。もう二十歳越
して居るではないか。もう少しは實社會といふ事も考へなくては……金持の紳士
がお前を欲しいといふて居られるのぢや。私も今色々の困難があるので此の事が纏
まれば好都合だし、それにそれ許りぢやない、お前の行末も幸福になるのぢや、お

前はどうか思ふ」

「堅く其の事はお断り致します」

「それは又何故じや」

「妾はチャリーさんを愛して居るのです、堅い約束がしてあるのです」

「チャリーさんは死んだじやないか。お天道さんが西から出ても蘇つて来る氣遣ひはない。本船の二艘のボートが見付かつて、一艘は沈み一艘は空つぽだつたと言ふではないか、これ程確かな話はない」

「だがお父さん、妾はいつまでもチャリーさんを信じて居ります」

「蘇生つて来る事を信じて居ると言ふのか」

「それも信じます、又心も信じて居ります」

第四卷 墓から歸つた人

父は恨めしさうに娘を見る、こんな剛情を張る時には、いくら説法しても駄目だといふ事は、ウォールコット親爺多年の経験で善く呑み込んで居る、親爺は氣の毒さうに、セヴァステアンに事の由を話した。セヴァステアンは内心の情炎を押しかくして、今後は單に友人として交り度いと申し込んで事は済んだ、月日かくして遠慮なく過ぎ行き、チャリーの船出してより早一年に近い頃となつた、今迄猫を冠つて居つた、セヴァステアンは、そろりと猫を脱ぎかけた。

或る日、彼はレオンテインに向つて

「私は到底貴女の愛を受ける事が出来ないとするれば、其の事はふつゝり締めます、其の代りにどうか友人となつて下さい。そして只名義丈けでよいから結婚したと言ふ事にして、私の農園にお住ひ下さい。貴女の氣儘になすつてよいんです。何事も貴女に任せます……そうすれば貴女の心も済み、又私の顔の立つといふもの……」

彼女は断乎として刎ね付けた。併しいくらか心動かぬではなかつた彼の親切さう

な言葉が、チャリーの死に傷んだ心に少し食ひ入つたのである、其の夜親爺は更に口説き始めた

「お前がセヴァスチアンさんへ嫁つて呉れなくては、私も身代限りになる許りだ」娘は此の言葉を聞いて戦慄した。

チャリーさんは死になすつたのも、只名義丈セヴァスチアンの名前を取つたとても構はぬだらうかしらなど、迷ふた。

翌くる日、セヴァスチアンは更に前日の様にレオンティンに申し込んだ、大分返事が有望となつて来た。

「兎に角、少し考へさせて下さい。後に御返事致しますから……」

前に述べた如く、チャリーは船火事に遭ふて、萬死に一生を全ぶし、岸近き岩に打上げらるゝや、其の儘夢心地となつて仕舞つた。幸ひにも此の海を通つた、通船

に救はれて、或る港に上陸させて貰ひ、それから徒歩でデルガドの港へ歸る事となつた。而も心は既に夢寢にも忘れた事のないレオンティンの許に走つたのだ。

デルガドの町の入口に、敗殘のチャリーは軽い心に乗せた重い足を運んで来た。

「オヤ！チャリーカーゾンさんじゃないか。まさか幽霊じゃあるまいね」と、見知りの方は驚ろきの眼を彼に浴せた。

「チャリーさんが歸つて来ては、又セヴァスチアンの敵だぞ」と、喋り亂らす梅干婆さんもあつた。

チャリーは怪訝な顔をし、様子を訊いた。

「此頃セヴァスチアンさんはウオルコツト家へ入り浸りですあ」と、人々は言ふた憤怒の炎がチャリーの胸を焼き盡さんとした、彼は暗然として重い心を重い足に乗せて、町の方へ歩んだ

「女心と秋の空とはよく言ふたものだ」

これが町人等の彼を見送る言葉であつた。かくする間にウォルロツト家にては、レオンティンを口説き落さうとして、セヴァスチアンの兄弟デイゴも應援に遣つて来た。彼の作戦は、チャリーの暗黒面を誣めて、少女の心を疎隔せしむる苦肉の策であつた、彼は夾かな辨を以て、物静かに言ひ出した。

「カーゾンさんは、此の度の探險船を仕立てる爲めに、親から譲り受けた財産を賣却したんです。そうでしたね」

「お仰る通りです。併しカーゾンさんの事に就いて貴君が御尋ねになる理由は何？」

「別に何といふ理由ではありませんが、只事實であるかどうかと……」

「事實であれば何だと言ふんですか」

「お嬢さん、御存じの通り私の兄弟は、不當の利欲を貪る様な人間ではありません。彼は真正直な人間です、私の話す事がお氣に障りましたら、それは私の爲です」と頭を撫でた。

「貴君の御仰る事は、薩張り判りません」と彼女は、相手の顔を穴の明く程凝視めた。デイゴは撓まず語を續けて

「マア或る人が借金をして財産の一部を抵當としながら、其の財産を他に賣却して代金を横領したとしたら、どうでせう……」

「貴君は、チャリーさんに對して諷刺を言つて入らつしやるんですか」

「實はそれなんです。御存じでも御座いませうが、昨年私の兄弟が紐育へ参りました節、お宅の御父さんから、チャリーカーゾンさんに宛てた紹介状を持つて行きました」

「そんな事は一向存じません」とこう言つて、レオンティンは何か此の人等は彼を陥れる罫でも作つて居るのかと不安を感じざるを得なかつた。

「それでは事實を話しますが、カーゾンさんは、此の度の探險費を作る爲め、私の兄弟から莫大の金を借りたのです、それで低當物件を密かに賣却して、其の金を着

服したんです」

レオンテインは、此の見え透いた畏を心に嘲笑しながら

「若し、貴君がカーゾンさんの性格を御承知なら、そんな事が決して有り得べからざる事を合點なざるに違ひない」

「では、これを御覽下さい」と言ひつゝ、デイゴは衣囊から一通の證書を取り出した。證書の額面は莫大な金額で、署名人は正しく、チャリーカーゾン、宛名はセヴァスチアン、ナヴァロに違ひないが、署名は勿論偽りである。そしてウォールコツトが紹介状を書いた件も偽りであるのだが、これは豫て、打合せてあつて、娘が訊いた場合には、確かに書いたと辻褃合はず手筈になつて居るのだ、この狂言は總て「海坊主のルイ」と綽名ある、悍猛の悪漢ルイ、ラムの仕組んだものであつて、署名は眞赤な偽事である、レオンテインにとつては、これを見破る程容易い事はない。彼はチャリーの署名は戀文に依つて數知れぬ程持つて居るのだ。デイゴは證書を彼女の

の前に突き出した。

「此の證書は偽造です。チャリーさんは盗人ではありません」

彼女は寧ろ冷かに笑つた。此の刹那である。一青年が突然此の室へ飛び込んで来た、顔は日に焼けて黒く、着物は破れて垢だらけだ。レオンテインは顧みた。そしてそれが永い／＼間戀焦れて居つたチャリー其の人であるを認めた時に、二人の體は一つとなり唇と唇とは熱い接觸を保つた。相愛の男女は暫し夢心地であつた。今の今まで、若しやと女の心を疑つて居つた、チャリーも、一時に疑雲を拂ふ事が出来た。驚ろいたのはデイゴである、天から降つたか地から湧いたか、冥府にあるべきチャリーが一番大切な幕へ飛び出して来た。彼は周章狼狽、何をしてよいか判らなかつた。チャリーは少女を離れてデイゴに向つた。彼は兄弟のセヴァスチアンに似て居るので間違つたのであつたが間もなく、それと解つて、稍手持無沙汰の態で居る。此の時、デイゴの様子こそ見ものなれ。彼は急いで證書を衣囊に隠さうと

した。而し手は戦いて、甘く入れる事も出来ない。彼が焦心立つて居る間に、チャリーは先のレオンテインの言葉を思ひ出して

「それは一體何ですか、貴君は私を盗人にしやうとしたのですな」

デイゴは言葉なく突立つた。そして最早逃仕度か窓の方へのみ氣を配つた。レオンテインはそれと察して、立塞つた。

第五卷 血塗れの格闘

「チャリーさん、あれはあなたの証文です。貴君は亞米利加で、お父さんの遺産を抵當にして、セヴァスチアンから金をお借りになつたんですつて？あれは其の証文です」

「チャリーは此の時突如として、室を去らんとするデイゴを遮つた、
「其の証文なるものを見せ給へ」

「君に見せる必要のないものだ」

「必要がない、僕の署名がある証書なら、僕は見る權利を主張する」

「此の証文は兄の物だ。君に對してどうするかは、彼の權限にあるのだ」

「どうしても見せられぬといふのか」と一歩進んだ

形勢不穩と見て、デイゴは室の机の上にあつた重い鐵の文鎮を手を取つた。脅して置いて、逃る積りなのだらう。

「君はそれで僕を撲つ積りか」とデイゴに言ひ乍ら、傍のレオンテインを顧みて

「貴女は暫らく外へ出て居て下さい」

「貴君は何を爲さる積り。私さへ信じて居つたらよいではありませんか。其の証文は慥かに贖物です。そんな卑怯な人に構はずと、逃がしておやりなさい」

レオンテインの言葉なら何でも諾くのが例であつた。

彼は手を引かうと思ふた。其の時レオンテインは頓狂な聲で叫んだ

「チャリーさん」

彼女はデイゴが、鐵の文鎮を以て背後からチャリーを撃たんとして居るのを認め
たのである、

チャリーは身を翻へしてデイゴに跳りかゝり其の文鎮を奪つた

「貴女は外へ出て居つて下さい」

「大丈夫？ 怪我などさせては不可ませんよ」

「温和しく證文さへ渡せば、僕は手を引く」

彼女は室の外へ餘儀なく出た。チャリーは片手に例の文鎮を持ちつゝ彼女を締め
出すや、机に倚りかゝつて喘んで居るデイゴの方へ引返した。

「兎に角證文を渡し給へ。君は僕の名譽を傷け且つレオンテインを瞞さん企なんだ
な、今後僕の執るべき手段は後日判る。今兎に角證文を渡し給へ」

「僕を歸し給へ」とデイゴは押して逃げやうとした、

「兎に角、證文を渡し給へ」と遮つた

斯うなつては暴力を以て逃げるより外途はない。矢庭に彼は跳び掛つて、チャリ
ーの頸を締めた。彼は多少體術の心得がある上に、力か優れて居るのである。兩人
は死力を以て争ふたデイゴはチャリーの頸を締めた腕を益々強めた。チャリーはい
つか文鎮を手から落して仕舞ふて、素手で夢中になつて相手の顔を撲り付けた。デ
イゴはいつかかな締めた手を離さない。締めてくゝ氣絶させ様として居るのだ。チャ
リーは息が窒りさうになつた。そして無我夢中に撲つた。デイゴの顔からは血が流
れて血達摩の様になつた。二人は組んだ儘、室の中を上になり下になり争ふた。室
の外で此の音を聽いて居た。レオンテインは氣が氣でない。そして父を呼ぼうと書
齋の方へ行つた。書齋には、父はセヴァスチアンと何か談して居つた。父はセヴァ
スチアン兄弟の深い企みは知らなかつたが、何となし不審の念を抱いて居つた。そ
して、デイゴを娘の室へ遣るに及んで愈々變である哩と感じた、それにセヴァスチ

アンの落付かぬ様子も怪しいと思ふた。

ウォルコット家は中々廣大なので誰しもチャリーの這入つて来た事に気が付いた者もない。其處へレオンテインが慌たゞしく這入つて来た。

「来て下さい、来て下さい。争闘が始まつたんです、今殺す所です」

ウォールコットとセヴァスチアンの耳に始めて、格闘の物音が這入つた。

「一體、誰が誰を殺さうとしたのだ」

「デイゴがチャリーを……」

「何！お前は寢言を言ふて居るのか」と父は怒鳴つた。

「本當です！チャリーさんは歸つて来ました。墓から出て来ました。早く来て下さい」

娘は父を戸の方へ引張つて行つた。

「危険い」と言ひつゝセヴァスチアンは先に立つた。戸の所には、此の家の下

女下男が蒼い顔をして、慄へながら格闘の音を聞いて居た。それで一人として中へ這入つて行く勇氣のものもないのだ。

第六卷 文鎮は何處にある

室内の光景に至りては實に凄惨の極みであつた。

チャリーは死物狂ひでどうかこうか首締だけは放した。此の時デイゴは既に顔一面血に塗れて大分傷もうけて居つたらしい、チャリーは彼を放して遣つて、床上に落ちて居る證文を拾はうとして、身を屈めた、デイゴは又もチャリーが撲ち掛るか誤解して、よろめき立つて逃れ様としたがどうした機か躓いて後ろへ墮と倒れた。

何と間の悪い事であらう、丁度床に彼の鐵の文鎮があつた、彼は其の突角に後頭部を打付けた、彼は起ち上らうとして双手を擧げて藻掻いた。

やがて彼の顔は急に蒼白に變じた、そして何事か言はんとして得ず、其の儘動かなくなつて仕舞つた、チャリーは驚ろいて駆け寄つた、そしてシャツのボタンを外して心臓部に手を當て、見た、鼓動は更に感じない死！死！死んだのだ、彼は愕然として突つ立つた、そして呆然として死骸を見下した、九死に一生を得て歸れば此の慘劇に遭ふの運命に會した、彼れは漫ろ冷凄な氣の身に迫るを感じたのである、彼は血に塗れた鐵の文鎖を取上げて恨めし氣に打眺めた、その時漸く室外の人々がドヤ／＼と入り込んだのに氣が付いた。ウォルコツトや、レオンテインや、セヴァスチアンの顔が夢の様に彼の眼に映つた。

セヴァスチアンは突然死んだ、弟の側に向け寄つて膝の上に彼の頭を乗せた、そして指で兩眼を開けて見た、それは再び元の如くに閉ぢた、彼はもう一度開けて見た。今度は開いた儘睨んで居つた、子供の時代から仲のよかつた弟の死骸に取り付いて、彼は女の如く泣いた綿々の情は盡きねど、やがて彼は立上つた。

「汝！人殺し奴！よくも弟を殺したな、天命に依つて仇をとつてやる」と咆吼しながら、鐵拳を押へつゝチャリーに迫つた

レオンテインは飛鳥の如くに、兩人の仲に割つて入つた、そして片手を愛人の肩に掛け、片手でテイゴを禦いだ、

「それは嘘です、貴君こそ、贖證文を作つて、私を瞞さうとしたではありませんか張本人は貴君です又テイゴさんは、卑怯にも背後から、チャリーさんを文鎖で撲ち殺さうとしました、テイゴさんが頭を割つて死んだのは自業自得といふものです」

此の時まで、慄へて立つて居つた下女下男共が一團となつて死骸の傍に来て、とり／＼に死人の噂をした、生前鼻薬でも利かして置いたものか、皆讚めそやしたチャリーは形勢の自分に非なるを感じた、チャリーは、レオンテインの肩に腕をかけ、なるべく死骸の見えない様に遮り立つて

「ネ、決して私が殺したのではありません、私の證文を贖造したから、私は只其の

「證文を渡して呉れと要求した迄なんです、それで證文を渡さんのみか、私を締め殺さうとしたんです。それに自分で誤つて頭を割つたんです」

「嘘言奴！断じて證文は贋ぢやない、昨年紐育で貴様に貸した金の證文なんだ、貴様は親爺の財産を抵當に入れながら其の財産迄賣り飛ばして着服したじやないか、こゝに慥かな證文がある！」と床から拾つた證文を擴げてウォルコツト親爺に見せた、彼は其の文言と署名を見て大きく頷いた、

誤解せらるゝ時とは仕方のないものだ、チャリーの形勢益非となつて来た、

「デイゴは自分で倒れて、誤つて頭を割つたのだ、よゝ後頭部の傷を見れば判るとチャリーは言ひ放つた、

「顔の傷を見ろ！貴様が文鎮で撲つたに違ひない、拳位でこんな傷が出来るものか」

彼は氣味悪い眼をギョロつかせて更に言つた、

「文鎮は一體どこにある！」

此の時チャリーは自分が文鎮を握つて居るのに氣が付いた、そして、ウォルコツト親爺も自分がデイゴを殺したものと誤解する理由も、こゝにあるを悟つた、彼は文鎮を床の上に落した、それは彼を有罪と定める判官の宣告の槌の如く響いた、沈黙が一時此の室を支配した、先程出て行つた下男が歸つて来た、彼の後に二人の警官が従つて来た。

警官はツト進んでチャリーの兩側に寄つた、一座の眼がチャリーの一身に蒐まつた、彼は靜かに顔を上げて、彼女の心を讀むものゝ如く見つめた、彼女の眼には、昔ながらの愛の露が光つて居つた、しかも其の露には驚ろきと疑ひと恐れとの影も宿つて居つたに違ひない、チャリーは覺悟せるものゝ如く、手を差し伸べて警官の爲すに任せた。

第二篇 無人島上の白骨

第一卷 永劫の暗へ

「被告を殺人の罪に依り無期徒刑に處す」と裁判官が嚴かに宣告すると傍聴席に色色の囁きが起つた。

突然傍聴席から美しい叫聲が響いた。

「彼には罪がありません。彼には決して罪はありません」

叫聲の主は他ならぬ、レオンティンであつた。

彼の媚々しい、可憐な姿が傍聴人一同の心をいたく動かした。

何たる不法な判決であらう、只正當防禦したのみだ、そして死の原因は自己の過

失からではないか、しかも此の何等罪ない被告に對し無期徒刑！天下斯くの如き矛盾した裁判が何處にあらう、

怪しむ勿れ、身に法服を纏へども、アルゼンチンの此の裁判官はセヴァスチアン

の手先に過ぎんだ、セヴァスチアンから扶持を貰つて居る以上は、主人の命に従

ふのが當然の話だ、只こんな破廉耻漢に裁判權を任して置くのは、恰も狂人に及

物の沙汰である。

若し假りに犯罪を構成するとしても、若し被告がチャリーならぬ他の人であつた

らどうであつたか、一年か二年で済んだかも知れぬ、セヴァスチアンは彼の戀敵を

永久に葬るの策を講じたに違ひない、裁判官は只道具に使はれたまでの話だ。

「その女を摘み出して仕舞へ」と、今宣告を下した法官は嚴命した。

其の間に、レオンティンは氣を失ふて、父の腕に倒れた、チャリーカーソンは何

だか悪夢に魘されて居る様な心地がした、そして宣告の聲も夢心地にきくのみであ

つた。

突如として彼の胸中には走馬燈の如く少年時代よりの事が浮んだ、螢雪の功を積んだ苦學時代如何に苦しかりしよ、それから貧乏文士となつて勉強した、そうく懸賞小説に當選して雀躍した事もあつた、それから一かどの文士として世に立つた得意時代、父の死、そして少し許りの彼の遺物の中にシヨセフ、テキスターから贈られた不思議な饅頭を見つけた其の中には、狂神志に關する書類があつたのだ。それから自分は海上王モルガンの密かに遺した寶の探險に志した事、それから難破して歸つて來た事、將にデイゴの罫に掛らんとして、之と争ひ、其の結果意外の奇禍を蒙つた事などそれからそれと糸を引出す如く思ひ起された。

嗚呼自分の不運だ、若しあの時せめて文鎮を手にして居なかつたら充分な反證を擧げる事も出來たらう自分は今の今迄無罪と思つて居つた、それに無期徒刑！彼は此の宣告を聽いた時第一起つた感念はレオンティンに氣の毒といふ事であつた、そ

して第二に起つたのは、どうしても牢を逃れて、彼女の處へ行かねばならぬといふ事であつた、本獄に下つてからは稀れにしか面會出來ぬと思ふたので、レオンティンは其の翌日、チャリィを未決監に訪ねた、面會室に待つて居ると、やがて小さい窓が開いた、そして懐かしいチャリィの顔が現はれた、二人の温かい胸と胸とを隔つるには冷たい鐵の柵がある、男女は相對してやゝ默然乎として居つた、此の時、レオンティンの胸には、新しい希望の光が宿つた、自分は飽くまでチャリィの罪を雪いでやらうと、

「チャリィさん、妾は命をかけてもあなたを再び世に出して見せます、折角船火事

で命を拾ふても、こんな目に會ふ積りじやなかつたんでしやうね」

「どうか私の事は諦めて、他に適當な人と幸福な生涯を送つて下さる様……」
何と悲壯な言葉ではないか、しかもこれが彼女を眞に愛する途なんだ、併しレオンティンは諾はなかつた、兩人の熱い唇は、冷たい鐵格子を隔て、相合した、

「もう時間だぞ」と涙ない看守は頓着なく戸を締め切つた。チャリーは暗然として鐵牢の下に引かれて行つた、レオンテインは幾夜雜念に睡りを妨げられたらう。若し自分がセヴァスチアンの妻となる事を承諾さへすればチャリーは放免さるゝに違ひない、しかし其の曉には再びチャリーに會はすべき顔がない、何れにしてもチャリーを失ふ事となるのだ。どの途彼を救ふ法は絶えた。彼は絶望の淵に呻くのみである、チャリーが集治監に移されて數週の後、ウオルコツト親爺は、娘に對つて又口説き始めた。

「娘や、お前も知つて居やうが、今がウオルコツト家の興廢の瀬戸際だ、若しお前が温和しくセヴァスチアンへ嫁つて呉れるなら、此の身上は持ち返す、そうでないと明日からお前と私は袖乞ひをしなけりやならん様になる」

「でも、妾は彼の方を愛して居りません」
依然として齒が立たない。

「彼の男と結婚すればお前の幸福ぢや、一升買する様な貧乏人に嫁くより、金持ちの奥さんになるのがどんな幸福だか知れやしない、愛なんといふものは結婚してから自然に生じて来るもんだ、それに又お前だとして獨りで育つた譯でもあるまいお前にかけて丈けのお金があれば私も今頃は樂隠居なんだが……」

娘は、此の時キツト父を凝視した。

「お父さんはお母さんの生きていらつしやる時に貴父はお母さんを愛して下さつてそしてお母さんと結婚なさる時も矢張りそんな事を仰つたの？」

親爺の心は動いた、

「それぢや、お前の氣に任せる」と、兜を脱いで、

「だが返事は一ヶ月以内にして貰はなくてはならんよ」

レオンテインは承諾した。

約束の一ヶ月が経たぬ間に、セヴァスチアンは又も訪れた。彼れは永い月日の間

彼女の歡心を買ふに汲々として居る、そして此の間も又改めて結婚を申し込んだ。彼女は運命の巨掌につかまつて居る様なものだ、そして近い中に御返事致しますと約した。

第二卷 逃走の計畫

暗い牢屋の窓吹く風は

娑婆の方へも吹きまわる

こんな俗語がある。作者は生涯の大部分を集治監の鐵窓の下に暮した人間だ。チャリーの繋がれた監獄から度々逃走者が出るといふので終身懲役の囚徒は、大西洋中の一孤島へ移さるゝ事となつた、チャリーの脱獄の望みも少くなつた、しかし絶えたのではない、チャリーは其の望み少ない脱獄を敢行せんと決心した、そして出来るだけ、輸送先、及び輸送方法等を探つて居つた。

移送の日が来た、囚徒は鎖に繋がれて、波止場へ護送され、やがて運送船の暗い監致室に投げ込まれた、日光に浴する時間としては只一日に半時間のみ、豚と雖もこれよりは上等な暮しをして居る。

囚人は二人づゝ、重い鎖に繋がれて居つた、若し悪い相手にでもぶつからうものなら喧嘩ばかりして居なければならぬのだが、チャリーは幸に穏和しい老囚と相棒になつた、老囚は逃走してもよし、しないでもよしと大悟したるものゝ如く、一向無頓着であつたが、それでも相談丈けには乗つた。

チャリーは自信あるものゝ如く囁いた。

「假りに、あの吊してあるポートをうまく卸したとすると苦もなく逃げられるさ」
「看守の彈丸を食ふせ、それでなくとも水がなけりあ乾干になるまでさ」と一人の囚人が危んだ。

「水はポートの水樽にある」と、チャリーは説いた。

「ぢや食物はどうする？」これには一番困つた。

それからといふものは甲板に上る毎にチャリは残り物の鹽豚の肉のまるで象皮の様に堅いやつだの、石の様な味のない堅パンなどを隠して来てはポートの中へ投げ入れて、只管逃走の準備を怠らなかつた、

相手の老囚も知らぬ振りをして居つた、老囚は既に諦めて居るのだ、誰れでも重罪囚となると始めの間は只逃げやう逃げやうと朝から晩までその事許り考へて居るものだ、併し幾年も経つて、とても逃げる事は駄目だと観念すると、どうでもなれといふ氣になるのが常だ、老囚も既にそれだ、彼は老年になつて墓場の近いのを知つて居る、それでもチャリーの逃げたい心を憐れと思ふて居つた。

船が出てから三日目の朝、相手の老囚は突然卒倒した、チャリーは驚ろいて額に手を當て、見た。火の様な熱なのである、老囚の外にも同じ様な患者が数人出た。一體不衛生な生活して居る牢獄には、こんな悪疫が出たがるものだ、恐るべき腸チ

プスが襲ふて来たのである、悪疫は猛威を逞しうして来た、翌日最初の死人が出た續いて三四人水葬された、かうなると船長は自衛の策として囚人を船艙に閉じ込めて甲板へ上げぬ様にし、水さへ運んでやらなかつた、熱に苦しむ囚人は水を呼んでも雨滴程も落ちては來なかつた。焦熱地獄！方にこれだ、チャリーの相手の老囚の容體は非常に悪くなつて來たをして今死の床に彼の身の上話を残すのであつた。

「若い、袖摺り合ふも他生の縁といふ事がある、お前にこうして死水……といふても水もないが……見送つて貰ふのも前生の約束だらう……」と、苦しげに呻つて、

「私の牢へたゞき込まれた譯はこうなんだ、今から三十年の昔だ、私は人を殺した其奴は私の娘を辱しめた奴だ、若し其奴がお上の役人でなかつたら私は無論無罪なんだつた」と、一息入れて、

「若い、お前さんは何の罪で來たのか知らぬけれども永い年月が経つとだんく

気が弱くなつて私の様に何事も諦めて仕舞ふ様になる、もう、私も死ぬ、此の苦しい娑婆の役が漸く了へるのだ」

チャリーは無限の悲しみを以つて、老囚の枕邊に侍した。此の老囚にも妻があらう。三十年の永い年月歸らぬ夫を孤燈の下に待つて居るのであらう、其の娘といふのも大分の齡になつて居るに違ひない、そして自分の爲めに牢獄に呻吟してゐる老父に對し感謝の涙に咽んで居るに違ひない。

こう考へると善人と悪人とはどれ程違ふのか、義憤のために下した一撃が一生を破滅させ、セヴァスチアンの様に贖せ證書を造つて人を陥れる奴が大道狭しと濶歩して居る。

又も彼の眼前に浮ぶはレオンテインの姿であつた。レオンテイン！セヴァスチアン！あゝ自分はどうしても此の鐵鎖を逃れなけりやならない。

「そうだ！」と彼はうなづいた、彼の頭には今電光の閃きの如く世にも恐ろしい、

凄い、未だかつて人の考へた事もない逃走の計畫が浮んだのである。

第三卷 大洋の底へ

何うしたら此の船は逃れる事が出来るか。暗に紛れて甲板に出で、ボートを奪つて逃げやうか。そんな甘い話とはとても出来やうもない。それではどうしやう。

小さい窓穴から海面をみるに船は漸く八哩位の速力しか出てない。一旦海へ飛び込んでからボートを盗まうか。それは出来ぬ事はない。けれ共海へ飛び込むには何うしても甲板まで出ねばならぬ、矢張り駄目な話だ。夜になつてから、病める老囚は熱に浮されて何か口の中で喋り續けて居つたが、突然

「マリア、アンデラー」と叫んだ。そしてチャリーの腕に倒れて死んだ。マリア、アンデラー、とは誰の名か。妻の名か、娘の名か知る由もない。チャリーには重大な仕事がある。徒らに躊躇すべき場合でない。彼は入口の方へ手探りで歩いて行つて

重い扉をたゝいた、外に立つて居つた番兵は、小さい穴から怒鳴つた。

「退れ、何だど？ 貴様の相棒が死んだのだと？」

「チャリーは事の顛末を告げた。チャリーは指圖通り死骸を長椅子の上に横へた。半時間もすると数名の番兵が這入つて来た。騒ぐ囚徒等を鞭で制しつゝ死骸を棺とは名のみの粗末な箱に入れて上から釘を打ち付け、厄病神に取付かれてはならんと急いで出て行つた、チャリーの仕事はこれから始まるのだ。而し此の棺が船首から投げられるか又は船尾からかト死生の岐るゝ處だ、船首から投げらるゝなら助かる途もあるが、若し船尾からだト土左衛門を免るゝ事は到底出来ない。幸ひの事は此の棺に死骸を收容するまでが番兵の役で、それから水葬は水夫の役になつて居るので其の間いくらかの餘裕があつた。これが天祐とでもいふものか。急いでやつたので釘は無造作に打ち付けてあつたので、蓋を取るには左程困難ではなかつた。彼は棺の中から老囚の死骸を取り出し、自分が中へ代りに這入つた。生れて初めて

這入つた爲めでもあるまいが勝手が判らんで實に窮屈な目に會ふた、彼は中から指の先でどうやらこうやら蓋をした。

窮屈丈けならまだ我慢も出来やうが呼吸が苦くしなつて来た。彼は窒息しさうになつて、何だか氣さへ遠くなつて来た。其の時、棺の隙から燈の光がさして人の足音が聞えた。番兵が来たのだ。

「シツカリ頼むせ」と一人がいふ。

「何だ此の蓋は釘を打つてないぞ。鐵槌を持つて来い」

「何、そんな愚圖くして居ると厄病神が取り付くせ。早く擔ぎ出さうよ」

釘も打たないで、二人の男は棺を階段の方へ擔ぎ出した階段を上る時に寢棺の頭の方が下になつた。チャリーは血が頭へ上つて来て、夢中になつて仕舞ふた。

やがて棺が下に卸されたのを幽かに感じた。而し船首から投げられるのだから、船尾からだか薩張り見當が付かない。船尾からなら一も二もない冥土行きだ。それも

よいかも知れない。

「投げ込め！」といふ聲諸共に落ち行くのを覺えた。そして棺が水面に落ちた音もした。何がなんだかこうなつては夢中だ。どこまでも沈んで行く様な氣がした。すると今度はズン／＼浮んで行く心地がした。不意に閃めく星がみえた。海面へ浮んで来たのである。彼れは肺の張り裂ける程深い息をした。すると目の前に本船の走り行くのがみえた。天なる哉彼は船首から投込まれたのだ。此の間は實に僅な間の事だ。船足が遅いので船首から投げ込まれて今船尾の處へ来た處だ。葬式を出すのに臺所から出す人もない。それと同じ様に水夫仲間でも船首から水葬するのが迷信的に習慣となつて居るのだ。何が幸ひになるか判つたものでない。イヤ幸ひになるかならぬかはこれからの問題だ。船はもう何秒の後には過ぎ去つて仕舞ふ。取残されたらどうか果しも知れぬ大洋の只中でどうして生を全うする事が出来るか。彼れは死物狂に船に取籠らんとした、世にこれ程望み少ない事が又とあらうか。其の時

彼は船尾から一本の繩が可成り長く海中に引いて居るを認めた。彼は遮二無二それに繩り付いて暫しが程は海中を引かれて行つた。繩り付いたは付いたが、さてどうしてあのボートを得られやう。彼は失望の眼を以て甲板を見上げた。その時東天は漸く紅ならんとして来た。若し明け離るれば何と施す手段もない。あゝ我が運も盡きたか。今は甲板に上つて漸く免れ來つた生地獄の苦を繰り返さなければならぬ其の時曉のもやが下りて來た。そして海面は暗騰として見えなくなつた、時來れりと、彼は繩を登り始めた。船は波に揺られて彼れは船側に幾度かたつき付られた。それでも漸く甲板に上る事が出來た。彼は急いでボートの所へ行き、兩方の吊繩を交る／＼延ばした。ボートはだん／＼下の方へ行つた。大事な時である。仕舞つた水夫が見付けた。そして大聲に叫び乍ら此方へ走せて來た。彼は慌てながらボートの船首を先づ水に着けた。それから船尾の方を卸した。ボートは波にもまれて水が一杯に這入つた。只此の時一挺のナイフさへあつたら直ぐに切つてボートを出され

たらうに此の場合只結び目を解いてボートを卸すより外手段がない。併し今そんな呑氣な事をして居る時でない。危急な場合だ。一人の水夫は四人の逃走と見るや、拳を固めて怒鳴りながら此方へ馳せて來てゐるのだ。

第四卷 波に浮ぶ島

甲板の上で、チヤリーと水夫とは格闘を始めた。死物狂のチヤリーに勝てやう道理はない。水夫はやがて、撲り殺された。チヤリーは彼のポケットからナイフを取り出してボートの吊繩を切つた。五六人の水夫が變を聞いて駆け付けて來た。中にも一人の運轉士はピストルを發射した。チヤリーは最早猶豫すべき時ではない。既に本船を離れたボートを見掛けて海へ飛び込んだ。此の時一弾は來つて頭をかすめ去つた。幸ひに朝霧は船とチヤリーを隔てた。夢我無中で彼はボートの方へと泳いだ。そして遂に探り當てる事が出來たのである。ボートには多少の水が這入つて居

つたけれ共顛覆もせず居つた。命の綱と頼む食物と水樽とは腰掛の下に無事で居つた。彼はオールを手にして漕ぎ出した。併し、彼は未だ死の神の手を全く免れた譯ではない。何れの方向へ向つても四百哩以内には陸地のない萍渺たる南太西洋の只中に在つて、どうして此の木の葉の様なボートで命を全ふする事が出來やうか。朝霧が此の時カラリと晴れて來た。水や空なる蒼海原の彼方水平線上に一抹の烟を殘して行く船こそ、彼が生命を賭して逃れたる地獄船なれ。兎に角彼れは南に向つて撓ます漕いだ。かくする間に夜の幕が下りて來た。彼は潮流が何れより何れへ流れて行くかを辨じ得ない。只星を見當に南へ漕いだ。此の時疲勞を一時に減じると共に睡魔が襲ふて來た。彼の目に浮ぶものは、レオンテインの姿である。彼れは機械的にボートに入り來る波を掻き出した。不安の夜が明けると更に苦勞の一日が來た。終日彼れは漕いだ。通りかゝる船もないかと水平線を注視して居つたけれ共、それらしいものも見當らない。汽船航路を外れて居るからである。又夜が來た。此

の時食糧は既に盡きて居つたのである。食物が盡きた上に睡眠が不足したので、朝になると彼はガツカリした。加之、浪はだん／＼高くなつて時にはボートに這入つた。彼は只機械の人の如くに水をかへ出し且つ漕いだ。久しく見なかつた日光が灰色の雲を破つて輝いて來た。腦の疲れか彼は時々身の洋上にあるを忘れ夢は頻りにレオンテインの許に通ふのであつた。夜となく晝となく彼は波と戦ふた、いくら戦ふても勝つ見込のない戦ひである。彼は戦ひ且つ倒るの心を以つてそれを續けた。更に一の困難は彼を襲ふた。それは水の盡きた事である。彼は無意識に呑み乾したのだ。洋上に在つて水の無い程恐るべき事は無いのである。今は只手を拱して死を待つより外途はない。然り、彼は死を希ふた。浩然の氣が決死の胸に宿つた彼は凡ての執着を捨て、心もすが／＼しく青海原を眺めた。驚ろくべき事ではない、僅か五哩位の處に一の島影が現はれた！。も少しボンヤリして居たら識らずに通つて過ぎる處だつた。彼は船首を返すと共に其の島へ向つて漕いだ。霧に隔つて十哩以上

もあると思ふたのが案外近かつた。間もなく岸の岩壁が見ゆる様になつて來た。此の時彼の疲勞は極度に達した。それでも島を發見した嬉さに一生懸命で漕いだ。岸には斷岩が聳へて處々に暗礁もあつた。ボートが其の暗礁を通り抜け様とする時に不幸にして乗り上げた。水はボートの底の穴から遠慮なく這入つて來た。チャリィはボートを飛び出して岩に絶りついた。大きな浪が撞とやつて來て一度彼を沖の方へと持ち去つた。此の儘底冷たき太平洋の藻屑となつたらうか。イヤ／＼天は未だ彼を捨てなかつた。返す巨浪は彼を岸に打上げた。彼は岸の砂上に打上げられたまま前後不覺に睡つて仕舞ふたのである。

第五卷 「狂神巖」の謎

チャリィが目を覺ました時に、嬉々たる日の光は彼を哺んで居つた。そして小波が此の島の岩崖の岸に戯れて居つた。夢から夢とは此の事だ。彼は暫時過ぎ來し方

を思ひ出せなかつた。彼が気が付いて起き上らうとした時彼の手足は棒の如く動か
なかつた。彼が手足を撫で乍ら起き上つた時、さも自分の體を不思議さうに見廻す
位自分の運命の奇なるに驚ろいたのである。

チヤリーの漂着したのは絶海の孤島だ。磯打つ波は永遠に其の神秘を語るよすが
もない。先づ島の様子を見やうと高い所へ上つてみた。島といはうか巖といはうか
渺たる大海の一粟である。彼は彼方此方と見廻して元居し岩崖の方へと歸つて來た
驚ろくべきではないか。彼は岩と岩とに抱かれて風の吹き付けぬ砂の上に、人間の
素足の跡を見付けた。絶海の孤島に人の足跡？。彼は再び高い所へ登つて、聲を限
りに呼んで見た。其の聲は全島に響き渡つた。而し答ふるものとは磯打つ波の音
計りである。足跡の在る以上は人が居つたに違ひ無い。バタゴニアの蕃人だらうか
否々蕃人の小さな丸木船ではこんな遠い洋を渡る事は出来ない。チヤリーは不審の
胸を抱いて、最初上陸した濱の洞窟へやつて來た。更に驚ろくべき事が発見された

その洞窟には食糧が貯藏せられてあつた事である。野蕃人の仕業ではない、慥かに
白人だ。尠くとも文明人だ。彼は歡聲を發して飛び付いた。二年間位は支へられる
食糧である。罐詰の牛肉、ビスケット、ヂヤム、色々の食物である。これは必ず日
蝕でも觀測する爲めにやつて來た測量隊の遺物かなんかであるに違ひない。彼はミ
ルク、砂糖、麥粉、茶、コーヒー、マッチと檢べて行く間に傍に經緯儀の様な器械
の壞れたのを發見した。彼が測量隊の遺物と思ふたのも無理はない。それにしては
食物が多すぎる。彼は迷言に入つた。

「誰れがこんな食物を持つて此の島に來て居つたのだらう」と濱邊を歩みつゝ考
へた。砂上に一つの白骨が横はつて居つた。彼は愕然として凝視した。人間の骸骨
だ？肩の邊の骨が曲つて居る所、殘つた齒の工合でみると老人に違ひない。これだ
食糧の主は。だがまた何の爲めにこんな島へ此の人が來たのか判らない。彼は再び
考へ始めた。かくする間に胃が又食物を要求して來た。彼は洞窟に引返して一つの

箱を開いた。中には鍋や釜等の臺所道具もあつた。そして燃料の残り少ない所をみると此の老人は餘程永い間此の島に住んで居つたものらしい。彼は食物を調理して飽くまで食ふた。腹の皮が張ると眼の皮がたるむとはよく言ふ事である。彼は手足を伸ばして日光に浴しながら海邊に横はつた。

不圖、彼の左の手が何物にか觸れた。一つの鏝である。彼は何氣なしに口を取つてみた。一つの書類が中に這入つて居つた。彼の心は躍つた。これこそ此の島の秘密を明かす手掛りである。書類の署名には。

「シヨセフ、デツキスター」とあるではないか。實に運命程奇なるものはない。彼の漂着した島こそ彼の豫て眼指す「狂神巖」その島である。すると彼の白骨はデツキスターの遺骸である。彼は「海上王」モルガンの遺寶を尋ねて此の島で最期を遂げたのか。

書類の文面はこうであつた。

有縁の士に告ぐ。此の狂神巖島上に二個の寶あり一は黄金にして、他は更に貴重なるもの也。前者はモルガン海上王の有にして我之を發見し他の者は即ち余の作れるものにして、余の死骸の手に握れる三個のくろき小珠こそそれなれ

此の三個の小珠は驚ろくべき魔力を發見者に顯はすべし

彼は骸骨の處へ走り行つて手を極めて見た、果然白い手の骨に握られて三個の黒い小珠があつた。不思議な事もあるものと彼は例の洞窟の方へ歸つて來た。其の時は海から蛇の様な腕かニユツと出て來て、突然彼に搦み付いた。驚ろいて引かうとすると更に幾本も幾本も出て來て彼を巻き付けた。大きな章魚に攫まれたのだ。怪物の様な巨大な章魚は鷹の様な眼を瞋らし、鷲の様な嘴を尖らして彼を沖の方へと引張つて行つた。やがて頭まで深い所へ來た。ヂヤリーはもがいたけれども知らず知らずに引込まれた。今はもう鼻まで來た。さうして遂うく海の中へ姿を没して仕舞つた。あんな大冒険をして買ふた命を、こんなくだらん事で終へてはつまらな

第六卷 二一つの眼

レオンティンは中々返答を與へなかつた。セヴァスチアンも又今焦心つては事を仕損じると思ふて、只管親父の方へ金を貸して其の窮状を救ひ、其の代りとして娘を貰ふ約束を更に固めた。彼は悠悠々迫らざる作戦計畫を立てたのである。ヂヤリイが判決されてから六ヶ月の後裁判所からレオンティンの許へ一通の書状が届いた。それはヂヤリイの死亡の通知であつた。逃走して溺死したといふてはお上の手落となるので。チブスの爲め船中で死んだとあつた。嗚呼！ヂヤリイは遂に死んだのか今は世に望みない體である、レオンティンは、残る生涯を人の爲めに盡さんと決心した。人の爲め。一番近い人の爲めは父の爲めである。彼は父を救ふ爲めに遂にセヴァスチアンと條件付の結婚をしたのである。條件付の結婚、珍らしい結婚である

先づ第一結婚は名義丈けに止める事、次に愛を得るまでは決して夫婦の交りをせざる事等である。レオンティンの愛がセヴァスチアンに移る事は出来ぬ相談である。結局結婚と言ふものは全く名許りのものだ。結婚式はデガルドの、米國領事館で嚴かに舉行せられ新夫婦は、紐育へ行つて、リヴァーサイド街の一等旅館へ泊つて、出来る丈の贅澤をして乙女の歡心を求めた。紐育着後一ヶ月の間、セヴァスチアンは凡てを我慢して居つたが何時までも續かう道理がない。女の心の少し和らいだのを見て又々しくこく言ひ寄つた、或夜彼は泥龜の様に酔ふて外から歸つて来る。帽子をだらしなく阿彌陀に冠り、衣服のボタンを外して、いつもの紳士風はどこへやら、まるで破戸漢其のまゝの風態でレオンティンの室へ這入つて来た。レオンティンは彼の氣味悪い醉眼を見るとギョツとして胸を押へた。

「レオンティン、お前は何時迄私をじらすのだい」

レオンティンは恐ろしさに後退りした。

「お前と私とは結婚式を挙げた。私はお前の望む事は何でもしてやつて居るのだ。それにお前はさつぱり私の思ふ事を遂げさせて呉れぬ。何か未だ不足でもあるのか」

「セヴァスチアン、貴君は結婚の時の約束を覚えてお出でしやう」とはね返した。彼は鷺が小雀を攫む様に彼女を抱きすくめ、顔を押しつけた。ブランデーの臭ひが彼女の息をつまらせた。

「それは一時の方便に約束したまでだ。法律上お前は私の妻ぢや。お前が私の心の萬分の一も酌んで呉れたら……」

セヴァスチアンは心の激する餘り泣き出した。少女は其の有様を見て更に嫌惡の念を増した。

「私はお前に惚れて居る。私はお前が私を愛してやらうといふ氣さへ起せば、奴隷と成つてお前の爲に働くをも辭さない。これ程にしてお前に嫌はれる道理が解らない」

解らない處ではない。現にレオンテインの愛人を無限地獄へ落して居るではないか。彼は彼女に抱き付いて、顔と言はず唇と言はず、頸と言はず處嫌はずキツスした。彼女は救ひを呼んだ。誰れも助けに來て呉れる人もない。此の家の下僕には殊更アルゼンチン生れの腹心の者を雇ふて置くからである。レオンテインは氣も遠くなつた。荒鷺は小雀を抱きすくめた。落花狼籍の幕が今や危機一髪の間にかかるのだ。眞に間一髪の危機である。其の時にセヴァスチアンの顔に不安の雲がかつた。彼は狂人の如く室の一方を指して何物をか恐るゝが如くたじろいだ。何を認めたであらう。二つの眼である。暗い處に光る鋭い二つの眼である。二つの眼の下に更に二つの白い手が有つた。而も其の一方の手には夏尙寒き氷の刃が握られて居るではないか。如何なる怪物が出て來たのであらう。化物ではない。慥かに動いて居る、レオンテインは其の短刀を握つた手が動いて、セヴァスチアンの方へ迫るのを見た、爛々たる眼の光はセヴァスチアンを射た。彼はだん／＼後退りして壁の

方まで押付けられた。恐怖の叫びを發すると共に彼は室の外へと逃げ出した。森閑たる夜の廊下に彼の逃げ行く足音が聞えて彼はとうとう外面へ逃げて行つて仕舞ふた。

二つの眼！それは果して何であらう。

第三篇 天涯の怪客

第一卷 「海坊主のルイ」

二つの眼は依然として光つて居る、今度は優しい光だ。短刀を握つた手を下に卸した。どうしても好意を以つて居る風態としか見えない。レオンティンは床の方へ躊躇した。

「怪しな物」は調子の低い聲で云ふた。

「汝の戀人に真心を捧げて恐るゝ勿れ、總ての事善果を結ぶべし」

何だかチャリーの口調に似た處もある。レオンティンは總身に血の湧くを覺えた我危急の刹那を救ふて我行く途を教ふる墓場からの聲ではなからうか。やがて木の

葉の散る程の幽かな響して其の「怪しの物」は消えた。そして室は元の通り何の變りもなかつた。レオンテインは懐かしの怪物の再び出現せん事を待つた。十分を過ぎ二十分と経ち、一時間も経過したけれどもそれらしい物も出なかつた。彼女は漸く立上つて室を見廻した。床の上には一振の短刀があつた。短刀は普通で怪しい物でなかつた。非常な鋭利な刃に角の柄がすがつてあつた。アルゼンチンの牧夫がよく使ふものである事を彼女は知つた。兎に角

「怪しな物」は幽霊でない。慥かに形のあるものだ。それにしても此の危い處を助かつたのは、思ひ返しても恐ろしくも又嬉しい事であつた。二つの眼と白い手……幽霊でないとしたら一體誰れの物だらう。彼女は此の世の人々に當て籤めて見た。世にも不思議な考へが胸に湧いたのである。チャリーのだ！チャリーは生きて居る、そして何か不思議な魔力を以て、私を保護して呉れるに異ひない。

* * *

チムミー、メーソンと云ふのは輕薄らしい、顔の蒼白い青年で評判の踊り子ムリエルの弟である。今しも彼はエレベーターを出て、とある室の戸を明けて這入つた。中から愛くるしい女が迎へて彼を抱き乍ら、

「チムミーさん」と弟を愛した。

弟は机の方へ行つて何か計算書の様なものを頻りに調べて居る、姉は心配さうに、

「會社の方は變りなくて……」

「別に變りはない」と、何氣なく答へた。

「ぢや 妾 歡樂閣へ行つてよ」

彼は房々した髪の毛に美しい帽子を冠せて出ていつた。ムリエルは町の人氣を一身に蒐めて居る踊り子である。今し化粧室を出て廣間へ現はれた彼女は、熱狂せる歡衆の拍手の盛んに起るを聞えた。一人の偉偉な壯漢が薰高き一輪の薔薇の花を手

にして彼女の前へ来り、恭しく之を捧げた。

「バングさん、これ何？」故意と驚ろいた風をして訊いた、下足番といふ卑しい身分の彼にも戀の情は湧いた。彼の今捧げた一輪の花こそ彼の崇拜の眞情を語るものなれ、彼の大きな體軀には、優しい情を宿し居る彼女の初めて此の「歡樂閣」へ出演する様になつた時から彼は人知れず心を動かして居つたのである、彼女は其の薔薇の花を胸に挿して舞臺へ出で歡呼の裡に舞踏を始めた。例令へば花に戯るゝ胡蝶の様な其の姿は歡衆を酔はさすには置かなかつた。見物は大概お馴染客許りであつた。只室の一隅に陣取つた二人の男だけが新顔だつた。一人は身丈の高い堂々たる男で今一人は人品の卑しいコセくした嫌な男だつた。二人は相識の間とは見えなかつた。ムリエルは舞臺の上から此の男を見た。

「貴方は大分メーゾン嬢に御執心と見えますな」と身長の高い方は先刻から融けさうな眼で踊り子を見て居る低い方の男に話かけた。小さい男は振向いて

「イヤ何………處で貴君には何處かでお目にかつた様な氣がしますが………若しや貴君は………」

「私はラヴェンガーといふ者です」と何氣なく高い男は答へた。

「ラヴェンガーと仰有いますか、私はルイラムといふ者です………貴君は矢張りアメリカのお方ですか」と、問ひながら相手の手を堅く握つた。

「イヤ他國の者です！」

「どうも失禮、實は何處かでお目にかつた様な氣がしてなりませんので………」

「多分夢にでも御覺なされたんでせう」と、軽く受けながら、

「處が大分彼女に御執心の様ですが、お會ひなすつては如何で………」

其の時ルイは相手の顔をジツと見た。

「野郎大分参つてゐるな」とラヴェンガーは心に思ひながら、

「では一所に樂屋へ参りませう」と、連れ立つて出た。此の時ムリエルの舞踏は終

へた處であつた。

第二卷 帳尻に大穴

ムリエルが樂屋の方へ行く途に二人の男は丁度出遭つた。ラヴェンガーは一禮して、

「メーゾン嬢！此の方はラムルイさんと申されて貴君の御最負になられ度と仰有るんです」

ムリエルは氣のなさそうに一才ルイの手を握つて

「皆さんにお目にかゝるは誠に嬉しう存じます」と、空世辭を撒いて更にラヴェンガーに向ひ、

「貴君にお目にかゝるのは此度が始めてですのに他の方を御紹介下さるとは誠に氣の強い御親切で……」と、皮肉を言つた。ラヴェンガーは澄まして微笑を湛へ

て居る、ムリエルは憤然とした。此の普通ならぬ光景をみた下足番のバングは、拳を固めて近寄つて來た。彼の顔にばかりと險惡の相が見えた。ラヴェンガーは尙ほ微笑して黙つて外套を突き出した。バング壯漢は之を強奪る様にして背後に廻つた。ラヴェンガーは両手を袖に突き込んだ。バングは之を着せてやつた、まるで喧嘩腰の着せ様だ。それでもバングはいくらかの酒代をせしめた。ラヴェンガーとルイの出で行く姿を二人は目も離さず見送つた。バングは此の時ツクツク下足番の悲しきを悟つた、そして先刻程の酒代を床の上になつき付けた。

「それでこそ男だ」と、ムリエルは言ひながら、樂屋へ引込んだ。

「歡樂閣」の門口でラヴェンガーはルイに別れた。ルイは何だか狐に憑まゝれた様な顔をして雜鬧へ紛れ込んだ。ルイとは何物であらう。世界を股に掛けて惡事を働く惡漢、

「海坊主」の「ルイ」とは此の男の事だ。チャリーの偽證書一件も此の男の細工な

のだ。彼は雑闇の中で何かよき掠鳥も居ないかと物色した。一人の男が、

「歡樂閣」から出てくるのを認めた。彼は追跡してやがて街の角で追ひ付いた。

「ア、もし、ナヴァルさん！」といやな叩頭をして近付いた。ナヴァルと呼ばれた

男は呼んだ方をみた。青天の霹靂である。赤道以南に居ると思ふた奴が此の紐育

まで来て居るのだ。

「へ、昔馴染にお言葉を頂戴していゝもので……」と、底氣味が悪い、

「今何うして居のだい。何か欲しいといふのか」と、セヴァスチアンは急ぎ込んだ。

「相變らず空々寂々で……へ、へ、へ」と、おべつかして、

「處で旦那、其の邊までお供しやせうか」

有離くない御供だ。

「仕方のない奴だ。一體何が欲しいといふのか。金か？」

「旦那御戲談もん……へ、へ、へ、金なら何時でも旦那に頂ける事になつて居るん

ですが。もつと外のもので。へ、へ、へ」と、此のへ、へ、へ、が油断ならぬ。

「じや何だ」

「寄邊渚の捨小舟……チンツン……と云ふやつで實は泊る處がないんですが……

……一寸旦那の御邸へ上つて奥さんの御機嫌も伺つたり……へ、へ、へ、何これでも

昔は旦那のお役に立つた事もあつたんで。あの贖……何、言はぬが花でしやうよ

處でこんな身になつたのも旦那の爲めと怨む様な事は毛頭ないんで、へ、へ、へ、」

毛頭處か強盜程の太い奴だ。

「夫れじや貴様はどうしても、私の宅へ來やうといふのか？」と、セヴァスチアン

は詰め寄つた。

「旦那さうむきになつてはお話が出来ませんので。それも一つの手でへ、へ、へ、」

又もへ、へ、へ、が出た。

「よもや旦那も昔の事はお忘れになりますまい。それで今は思ふ女と珍々鳴々とい

ふ壺つぼなんで。お羨うらやましい事ことです。所ところで毎度まいどお氣きの毒どく様さまですが少すこしお小遣こづかひを頂戴ちやうだいしていもんで……」と、とう／＼本音ほんねを吹ふいて、

「夫せれから、もう一つ御願おねがひといふのは俱樂部くらぶへ参まりますから是非貴君せひあなたの御友人おともだちに私わたしを紹介せうかいして頂いたきたいんで……」

これは困こまつた事ことだとセヴァスチアンは顔かほを蹙しかめた。

ムリエルといふ踊おどり子こは兩親りやうしんに死わかれた。從弟いそごのチムミーを手て一つで育さだて、來た。初はじめは女工ぢやうこうか何なにかして居をつたのだが其その後ごは、

「歡樂閣くわんらくかく」へ勤つとめて其その收入しうにふで暮くらして居をる。今いまは相當さうたうに收入しうにふもあるのだが、何分なにぶんこれまでの借金しやくきんも拂はらはねばならず、生活費せいかうひも嵩かさんで來たので懷中工合ふところぐあひは中々火なかくひの車くるまだおまけに此この女おんなは金かねを貯ため得えぬ性たちだ。金かねが這入はいればバツバ／＼と撒まき散ちらして其その日ひを享樂きやうらくしつゝ送おくつて居をつた。彼かれの手足纏てあしまとひは、弟あとうごのチムミーでこれには一番困はんこまつて

居をつた。チムミーといふのは、或あるる會社くわいしやの腰辨こしべんをして居をつた。姉あねに似にて金費かねつかひの荒あい方ほうで、おまけに放蕩者はうたうしやと來て居をるので大分帳尻だいぶんちやうじりに大穴おほあなを明あけたらしい。何時いつか賭博かどに勝かつたら其その大穴おほあなを埋うめ様やうと心掛こころがけて居をつたが、いつかな勝かてないで穴あなはますます大おほきくなり今いまは發覺はつかくの瀬戸際せまぎはとなつて來た。

「姉あねにはこんな事ことは言いはれんし。言いふた處ところで文無もんなしと來てゐるから駄目だめだ」

愈々絶望いよくぜつぼうだ。今日けふの午後支配人ごごしはいじんの顔かほに物騒ぶつさうな相さうがみえたつけ。鼻かぎ付つけたのに違ちがひない。明日あすは休日やすみだから支配人しはいじんの禿頭はげあたまは一日帳面いちちやうめんを調しらべるに違ちがひない。休やすみの明あけの日ひには

「御用ごよう！、と來るに極きまつてゐる。萬事窮ばんじきゆうすかね」彼は家うちへ歸かへつて來てから、帳尻ちやうじりを合あはせる作戦さくせんをした、よい思案しあんの出でる筈はずはない。出でるのは溜息ためいき許ゆるりだ。其その時とき、呼よ鈴ねが鳴なつた。姉あねが忘れ物わすれものでもして引返ひきかへしたのだらうと彼は錠ぢやうを外はずして戸かどを明あけた。姉あねと思おもふたのは刑事巡査けいじじゆんさだ。しかも二人ふたりだ。刑事けいじは彼かれを室むろへ戻もどして座すわらせ、滋々しげげ其そ

の顔を讀んだ。土の様な顔色總てを白狀して餘りありだ。

「全く私の仕業です。どうか明後日まで御猶豫下さい。必ず何とかして返済致しますから、どうか穩便に御取計らひ下さい」と、一も二もなく兜を脱いだ。

「では特別を以て明後日まで待つてやる、間違ふとお細だ。家の中に謹慎して居れ逃げる縛るぞ。では必ず明後日まで」と、刑事は念を押した。

第三卷 愈々牢屋だ

刑事と入れ違ひに、姉のムリエルは何も知らずに歸つて來た。彼女に一人の男が尾行して來た、それは他ならぬ、ラヴェンガーであつた。彼女はそれも氣が注がなかつた。ムリエルの室の前まで來ると、ラヴェンガーの姿は何處かへ消えた。刑事の歸つた後で、チムミーはウキスキーを叩つて居つた、姉は何か變事のあつた事を直ぐ察した。

「チムミーさん、どうしたの？」

チムミーは兩手で顔を掩ふた。酒が利いて來たのだ、しかし此の場合憂を拂ふ玉筭でなくて、却つて心配を増した、姉は弟の椅子の腕木に腰かけて、

「何だか聞かして頂戴な」と、慰めた。

「いけません〜」

「何？お金の事？聞かして頂戴なね」

「私は赤着物を着なければならん」と、自暴自棄に言ひ放つて、それから事の顛末を委しく話した。

「でもお金さへ返せたらよいんでしやう」

「大金ですせ、一千弗！」

姉は絶望の淵に沈んだ、一千弗！二日間調達はなければならん、二十弗位ならあらうが、それでは九百八十弗足りない、右から左へと金を費ふ彼女には銀行の預

金をした事がない。

「何とかするわ〜」と、彼は當もない事を繰り返した。

「罪を免れる方法が唯一つあるんだが……」と、弟は首を上げた。

「何？」と姉は眼を光らした。

弟は机の抽出から一挺のピストルを出して示した。

「チムミーさん。決してそんな事を夢にもして下さるな」と、制して、

「金の出来るまで決してそんな事をして下さるな。何とか方法が付くでしやうから決してね、ね」と弟の頭を抱きしめながら念を押した。實を云ふと、チムミーに自殺する丈の意氣地がないのだ。ムリエルは彼女の居間に歸つて深い考へに沈んだ。二日間に一千弗！どうしてそんな大金が出来やう、彼女は色々の空想を描いて見た。しかしそれは到底眞の空想に終らざるを得ぬ、ア、弟を遂に牢にやらなければならぬか。忽然彼女は驚愕の叫びを發した。室の隅の机の上に何か動いて居る

何だらう？手だ。白い手だ。何か其の手から落ちた。書類の巻いたのだ、それと同じ時に手は一本の鉛筆を握つて机の上の用箋に何か書いた。やがて怪しの手は消え失せた。ムリエルは用箋の方へ急ぐのであつた。文面はかうであつた。

明晩ルイラムより文書偽造罪の自白を求めよ、汝の弟を救ふに要する一千弗の金額は其の報酬として汝に與ふべし。茲に五百弗を手金として相渡すもの也。ムリエルは落ち居る書類を拾ふて見た。正しく紙幣で五百弗ある。

チヤリーの死んだ事は萬々承知して居る、裁判所でそれを公表して居る。しかし何だか今にでも生きて居つて自分を蔭ながら護つて居て呉れるのではあるまいか、先夜セヴァスチアンの毒爪から免れた時より彼女はこんな事を思ふのであつた。セヴァスチアンは神がレオンティンを救ふたものと西班牙人にありがちの迷信をして恐れた。それが爲め當分は何事も追らず相變らず彼女の歡心を求めるに汲々として

居つた、レオンイテンも努めて社交界に相携へて出入した、公衆の中が彼女にとつて一番安全の場所であるからである、或日、彼女は「歡樂閣」の評判の踊り子を見物しやうと云ひ出した。夫は一も二もなく承諾して出掛けた、付け覗つて居つた海坊主は「歡樂閣」で待ち伏せして居つた「海坊主」が入場すると例の席にラヴェンガーが既に座つて居つた。

二人は黙禮した。ラヴェンガーは例に似ず舞臺のムリエルの方へのみ氣を奪られて話掛け様ともしなかつた。何故ムリエルの顔許り眺めて居るのだらう。全く氣の揉める話だ。ラヴェンガーがムリエルに氣のないのは事實だ。それでは何の爲か。外に何か目的があるに違ひない「海坊主」はムリエルとラヴェンガーの顔を等分に見比べた。そしてムリエルの視線が自分に向つて居るのを認めた。とろけさうな秋波だ「海坊主」は方に「海鼠」になり相だ「海坊主」はしめた唇を甜めすつた。

第四卷 焰の「歡樂閣」

あんな美しい女が秋波を送るとは冥加な話だと「海坊主」は魂を宙に飛ばして自分の傍に夫婦連れの客が座つたのに氣が付かなかつた。

夫婦連れとは、セヴァスチアンとレオンイテンであつた、セヴァスチアンは「海坊主」と見合つた時に腰を浮かしたが、逃げる事が出来ないと見て仕方なく再び腰かけた。

「旦那ですか、どうか奥さんに私を紹介して下さいませんか」と、皮肉に出た。

「レオンイテンや、この方はレイラムさんといふて私の昔友達だ」

「商賣友達でさア、そこで其の代りに私はラヴェンガーさんを御紹介致します」

紹介せられて、セヴァスチアンはラヴェンガーなる人を怪訝さうに見た、一體此の男は「海坊主」と一しよになつて何をして居るのかと思ふた。四人は各胸に不

思議な思ひをした、それでも何氣ない態で目は舞臺の方を見て居るのであつた、樂屋ではムリエルは自分の出演の番を待ちながらどうして「海坊主」を瞞してやらうと考へて居つた、實にあんな嫌らしい男には話しかけるのもいやだ、しかし其の嫌な思ひをしなければ弟を救ふ事は出来ない、彼女は種々の事を考へながら樂屋の中を歩いた、入口にはビル、バンドが番犬の様に、帽子や外套の番をして居つた。其の偉大な體、其の眞摯な顔、彼女は何となしに頼母しさに感じた。やがて番が来た、彼女は一切の心痛を抛つて舞臺に顯はれた、喝采の裡に、得意の舞踏を演じたのである、彼女は一笑千里といふやつを舞臺の上からルイの「海坊主」に浴せた、「海坊主」の有頂天になつて居る傍に青菜に鹽のチムミーが隅つこにすくんで居つた、

海坊主が踊りの終るを待ち切れんで座を立つのを見たムリエルは、充分樂が利いたと廣間で彼の來るのを待つて居つた、數名の踊り子が手にく火鉢を以て樂屋か

ら出て來た、ムリエルは其の少女達から離れて、網を張つて居つた、果して「海坊主」がキヨロく眼で這入つて來た、彼女は寢椅子に倚つて嬌態を振りながら又一瞥を與へた「海坊主」はもうすつかり惱殺されて仕舞ふた、彼はツカくと進んで來て彼女の手を握り、寢椅子の方へ連れて行つて二人並んで腰を卸した、一生懸命である、弟を助けるも助けぬも此の場合の手管一つとも思ふたからである、

何も内幕を知らぬ例のビル、バンドは此の光景を見て居つたが、ムリエルの顔に迷惑さうな色が見えたので「ウーム」と虎の様に一聲唸るや、いきなり「海坊主」の襟首を攫んで二三間投げ飛ばした。拍子の悪い時は仕方のないもので、仲間が遅れた一人の踊り子が火鉢を持つて樂屋から走つて出る、出合頭に、毬の様に投げ飛ばされた「海坊主」と鉢合せした、機を食つて火鉢は投げ出され、中の火は床に散つて其處にかけてあつた絹の窓掛けに燃え移つた、折角仕組んだ狂言が、血の廻りの悪い此の大男に滅茶苦茶にされたので、ムリエルは怒つてビルバンドを罵つた、

「併し、ムリエルさん貴女が困つて居らつしやる風でしたので、彼奴を追拂つたんで……」と、馬鹿正直な彼は言譯した、腕達も時と場合による事だ、彼女は啜り泣きして、弟の運命を悲しんだ。

「火事だ！火事だ！助けて呉れ！」

場内が遽かに騒がしくなつて来た。

賑やかな奏樂がピタリと止んだ。

窓掛けに燃え移つた炎の舌は更に柱や壁を舐め始めた。歌舞の樂園が今や阿鼻叫喚の地獄となりつゝあるのだ。

第五卷 救ふて呉れたは……

見物席から大勢の人が雪崩の様に廣間へ押し込んで来た、一人の少女が躓いて轉ぶと、後から来た人は其の上の上に上にと折り重なつて倒れた、忽ちにして人の山が

築かれた。救ひを叫ぶ纖弱い婦人もあれば其の上を踏み躓つて行く男もある、婆さんが下敷になつて悶く、其の上を禮装の紳士が躓く、一大修羅の巻を現出した、火焰は忽ち「歡樂閣」を包んだ、渦巻く煙が窓から吹き出して、救ひを求むる叫聲が物凄く聞えた、内では電線が焼け切れて暗くなつた、外では蒸気ポンプの音と群衆の罵り騒ぐ聲が漲り渡つた。火事だと覺ると同時にムリエルは逸早く逃れて救護所へ走つた、彼は天に冲する火焰を眺めながら出来るなら人々を救はんと思ふた。けれども女の身のそれも出来得なかつた。いつか傍にビルバングも来て居つた、彼はムリエルを顧みてそう云ふた。

「中の人達は非常口を知らないのだ、貴女は向ふへ行つていらつしやい。私は救ひに這入るから」

彼はこういふて勇ましく煙の中へと突き進んで行つた、其の後背姿を見送つた彼女は恐ろしさにゾットしたのである、廣間に折り重つた人達も漸く大部分は逃れた

らしい。消防夫は負傷者を甲斐なく救ひ出してやつた。煙の中へ這入つたビル
 バングは一人の男が倒れた柱の下敷になつて呻いて居るのを見付けて、引出してや
 つた、其の男は「海坊主」のルイであつた。バングと「海坊主」とは打連れてムリ
 エルの方へ行つた、彼女は「海坊主」を見るや身慄ひした。
 「御無事で結構でした」と、彼女は漸く取繕らうて話しかけた。
 「御無事處の話ではない」「海坊主」は柱で強か頭を撲たれて脳がどうかして居る
 のだ。

「貴女は一體誰れですか」と、一向ボンヤリして居る、

「オヤ、此處はグノスアイレスぢやないぞ。一體どうしたといふんだい。此處は
 何處だい」と、取り留めもない事を口走りながら街の方へとよろめき去つた。折角
 の計畫を水泡に歸したのかと思ふとムリエルは矢も楯もたまらなく悲しかった。目
 の前にちらつくものは只一人しかない弟の赤着物姿である。彼女は失望の胸を抱

いて辻馬車で宅の方へと歸つて来た。弟は椅子に掛けて沈思に耽つて居る所であ
 った。

「チムミーさん」と彼女は弟の側に跪いた、弟は顔を擧げて姉を見た、姉の
 顔にも矢張り絶望の雲がかつて居つたのである、姉弟は期せずして相抱いて泣い
 た、愈々明日は冷たい獄屋へ行かなければならぬか。

偶然室の隅を見たムリエルは思はず叫聲を發した、弟も姉の視線の向く方を見
 て慄え出した。

チムミーの机の上の鉛筆が急に上の方に上つた。何か見えない手に持たれて居る
 様になると、又其の手が机の上の用箋を取上げて其の上に何か書く様子だ、前夜の
 様な紙の卷いた物がバタリと机の上へ落ちて鉛筆と用箋とを置くや怪しの物は煙の
 如く消えた。

ムリエルは急いで机の方へ行き用箋を取上げて見た。

爾全力を盡せり矣。次回には更に努力すべし。茲に残りの金額を與ふ、と、書いてある。

ムリエルは札を取上げて見た、慥かに五百弗ある。夢ではなからうかと彼女は思ふて見た、金は手にある。嚴然たる事實である。姉弟は更に相抱いて、共に恐れ、共に喜んだのであつた。

話は「歡樂閣」の火災の模様に戻る。

「海坊主」が樂屋の方へ行つた後、ラヴェンガーはセヴァスチアン夫妻と雑談して居つた。

「火事だ！」と、いふ叫聲が其の時起つた。彼等は群衆と共に總立になつた、入口には煙が立つて居つた。其の時座の頭取は舞臺へ現はれた。

「どうぞ、座に御着き下さい。ほんの火鉢が轉覆した許りです」

観客が再び座を占めたか占めぬ内に、けたまひしい叫聲が起つて全館は黒煙で一杯になつた。人々は皆逃れんと焦心た。そして茲に一場の混亂が起つたのである、ラヴェンガーとセヴァスチアンとはレオンティンの兩手を各々執つて戸口の方へ逃げ出した。此處には多數の人が押し合ひ合ひして居つたが三人共其の渦中に巻き込まれ、兎角する中にラヴェンガーのみ戸外の方へ押し出されて仕舞ふた。彼はレオンティンを助ける爲め戻らうとしたが、多數の押し出す力は恰も雪崩の様で之に逆らう事も出来なかつた、彼は何時となしに街の方へ突き出されて仕舞ふた。混亂の中でレオンティンは躓いて倒れた。夫セヴァスチアンは之を引きさうとしたけれども後から〜と押して来る人の勢ひで、拙手すると自分の生命が危いで彼は妻を置き去りにして避難して仕舞つた。

第六卷 又も戀敵

押され押されてレオンティンはエレベーターの傍の窓際に倒れた。燃えた材木が上から落ちて来たが、何かに支えられて幸ひに無事であつた。煙は濛々と襲ふて来た。彼女は半ば氣を失ふて仕舞ふた。誰れか自分の名を呼んでゐる様だ。傍の窓硝子が破れて音がしてレオンティンは氣が付いて目を見開いた。其處にはラヴェンガが立つて居つた、彼の顔は煙に燻つて黒く彼の手足は硝子の破片で負傷して居つた。彼はレオンティンを抱へて戸外に出てホツと一息吐くのであつた。

「貴女は御無事で結構でした。神様に謝さなければなりません」

ラヴェンガこそ救ひの神なれ、レオンティンは言葉なく熱き感謝の涙は頬を傳ふて落ちた。彼女は又しても過ぎし日の事を思ひ起して、チャリーの熱き愛の胸とラヴェンガの温かき情の手と何かの交渉があるのではないかと考へて見た。

逃れ出たセヴァスチアンは、丁度此の時二人に出遭ふた。彼はラヴェンガが自分の妻を救ふたのを見て却つて不快の面容をして居つた。レオンティンは手をラヴ

エンガの方へ差出した。彼はそれに唇を吻るのであつた。セヴァスチアンは堪らず近寄つた。

「お前は無事でこんな嬉しい事はない」と、彼は云ふた。

「妾を見捨て、お逃げになつても矢張り嬉しいんですか」と、彼女は返した。

セヴァスチアンは何か言はうとしたが其の儘黙つて仕舞ふた。何と云はれても仕方がないのだ。やがてセヴァスチアン夫妻は辻馬車で家の方へ歸つた。途中二人は一言も發しなかつた、セヴァスチアンの胸は曠患の炎に燃えて居るのだ。

思ひ起すのは昔の事である、彼女の心は少しも自分がない。自分は彼女の爲めにどれだけの時と金を費したか知れない。しかも彼女の愛を少しも得る事が出来ない。實に口惜しい事だと彼は感じた。更に又恐るべき戀敵が顯はれた、火事場の光景から見ると、妻の心は彼のラヴェンガに向いて居る様子。だどうしても彼奴になんぞ妻を奪はれてなるものかとセヴァスチアンは馬車の中で堅く決心した。馬車から

下りると、レオンテインは自分の居間へ這入つて行つた。セヴァスチアンは之に續いて這入つた。彼の顔には又も險惡の相が顯はれた。

「レオンテイン！」と、彼は突然彼女の腕を掴んだ。

「なになさるの！」と、彼女は恐れた。

「お前はいつ迄私を焦心すのか。お前と私とは結婚式を擧げた。それにお前はまるで私を犬の様にあしらつて居る。お前はまた死んだ罪人に心を寄せて居るのか」

「罪人ですつて？誰がチャリーさんを罪人にしたんです。チャリーさんは潔白な體です」と、彼女は眼を光らせた。

「兎に角彼は死んだんだ。そしてお前は私の妻ぢやないか」と、腕を執つて挑んだ。

「セヴァスチアン、貴君も紳士でしやう。名譽を重んじなさい。何時か妾が貴君を愛する様な時が來たら……」

何時そんな時が來るか判つたものでない。彼は益々暴力を以て迫つた、今は絶對

絶命の場合となつた。

「不思議な物」は此の時又も現はれた。今度は室の中央に出た。二つの光る眼と白い手！

短刀を握つた手は猛然とセヴァスチアンに向つて來た、彼は叫びながら自分の室に逃げ込み、内から堅く錠を下して小さくなつて居つた。妻は神様に護られて居るに違ひない彼は考へた。セヴァスチアンが逃げると其の「怪しな物」は嚴かな聲で彼女に云ふた。

「汝の戀人チャリーに真心を捧げて恐るゝ勿れ、總ての事善果を結ぶべし」

今度は瞭らかに「チャリー」と名を云ふて居る。

「どうか一目あなたの顔を見させて下さい」と、感謝にみちた彼女は「怪しの物」に向つて願つた。

「貴君は死んだチャリーさんではありませんか。そして妾を護つて下さるんではあ

りませんか」と、懐かしげに言ひかけた、何の答もなく「怪しな物」はだんぐり消えた。只其の時眼に寫つたものは優しい眼であつた。ほんに優しい眼であつた。何だカラヴェンガーの眼光に似通つて居る様だ……と彼女は思ふて見た。そしてラヴェンガーあるが故に益々死んだチヤリーを戀する情が燃えた。

第四篇 寶の山

第一卷 金山へ！金山へ！

不思議な眼と手とが顯はれてからセヴァスチアンは當分其の名義丈の妻を握まなかつた。けれども其の胸中に炎々として燃ゆる。死んだチヤリーに對する嫉妬の情は之を消すに由なかつた、彼を苦むるものは其の「怪し物の」のみでなかつた。彼の舊惡を知る「海坊主」のルイの出たのも彼の生涯を破滅に導く動機でなからうかと彼は恐れた。ルイが彼に付き纏ふのは單に金錢問題許りでない。俱樂部の友人に紹介して呉れと頼む所を見ると、もつと混み入つた計畫を有つて居るに違ひないと、彼は戦いた。もう一つ彼にとりて容易ならぬ事が起きた。それはラヴェンガー

なる怪しい人物である。未だ自分で害を加へた譯でもないが、兎に角自分にとつて決して利益な人間ではない。加之「歡樂閣」の火事でレオンテインが彼れに救はれて以來、彼女の心が其方へ傾いて居るのを見るに於ておやだ。

「火事の時、レオンテインは感謝の眼であの男を見て居つた、よし死んだチヤリーの事を忘れる事が出来たにしても、今度はあの男に氣を向けるに相違ない」と、苦しい胸をさすつた「歡樂閣」の火災から逃げ出した「海坊主」のルイは其の後姿を隠して仕舞ふた。セヴァスチアンは彼れが何か企て、居るのではないかと薄氣味悪く思ふて居つた。それから四ヶ月経つた或朝の事、彼れはレオンテインの背後を通る時、手にして読んで居る新聞に不圖「海坊主」に似た肖像のあることを發見した。それは果してルイの寫眞であつた。その記事には彼れが西部加奈陀に於て多量の金塊を發見して、一日にして成金になつた事を報導してあつた。尙ほ、新聞に依ると最近に地震の爲めに山が崩れて金脈の一部が露出したものであつて、其の山には尙

ほ金脈が必ず存在して居るものに違ひないとあつた。セヴァスチアンは暫時黙然として佇んだ。

「これはうまい事を知つたぞ、一つ海坊主に會つて金礦發掘の利益の分配に預らんけりやあならん、こう彼奴が成金になれば、屹度一所に仕事したくないと云ひ出すだらう。そうすれば今後例の一件に就いて脅迫される事はなくなる譯だ。これは甘い」

彼れはレオンテインを顧みて云ふた、

「明日一緒に西部へ行くのだよ」

「西部つて何處」

「西部の白人村さ。今お前が讀んで居た記事にある所だ、お前は其の男に會つた事があるだらう」

「いつか「歡樂閣」で會つた事があります。あなたの舊い友人だといふ事ではあり

「そんなか。名前はもう忘れて仕舞ひました」

「そう。あの男の事だ」

彼は自分の室へ歸つて来て作戦計畫を考へた。若し彼奴が利益を分配しないと頑張つたら、其の交換問題として、今後一切昔の事件に關して自分を煩はさぬ誓をさせてやる。そこで「海坊主」の方さへ喰ひ止めて置けば、レオンティンを口説き落す方に全力を注げるといふものだ、と彼は考へた。チャリーは死んだ。海坊主の邪魔は無くなつた。これからは必ずレオンティンを心の儘にして見せると、思はず微笑を浮べた時、彼は其の場で化石の如く身が固くなつて仕舞ふた。見よ例の恐ろしい二つの眼が室の隅に光つて居るではないか。二つの白い手も現はれた。そして空間に輝く文字を書いた。

「自白せよ」と、セヴァスチアンは兩手で顔を蔽ふて椅子の上に倒れた。再び目を見開いた時には其の「怪しい物」は既に消えて居つた。

「歡樂閣」で強か頭部を柱で撲つた「海坊主」は腦を傷めて記憶をなくして仕舞ひ、自分の名前のレイラムと綽名の「海坊主」のレイと云ふ丈けしか覚えて居らなくなつた。彼れは其の頃西部加奈陀に地震があつて、それが爲め金山に地這りが起つた事を聞いて砂金でも拾ふと其の金山へ出稼に行つた、そして人里離れた小さい小舎で荒熊の様な生活をして居つた。山に居る坑夫共は皆な喰詰者の生命知らず許りであつた

第二卷 一向存じません

此の山には砂金が大分あつたのだが、此の頃の地震で金脈が露出して産額も大分澤山になつて居つた。或る日の事「海坊主」は谷川で砂金の中に大きな金塊を發見した。最初掬ふた砂金の中に鶏卵程の金塊を三個發見した、彼れは又砂を掬ふて見た、色々の大きさの形の金塊が其處にも此處にもゴロ／＼して居つた。彼れの狂喜

は其の絶頂に達した。地震の爲めで山が崩れたので、其の豊富な金脈から谷川に押出されたに相違ない。泥棒猫が食物を見付けた様に四邊を見ながら誰か来やしないかと、彼れは金塊を袋に入れて小舎に歸つた。

それから數週間ルイは一生懸命で採取して悉くそれを小舎の地下に埋めて置いた。餘りにルイの舉動が變なので仲間の坑夫もそろ／＼感付く様になつて來た。

「赤鬼」と綽名を取つた、フィンといふ男は此の山に莫大の金が發見せられた事を聞いて、充分野郎共の貯へた處を見かけて奪つてやらうと、諸所に流浪して居つた配下の惡漢共を喚び寄せた。

「赤鬼」の一團はルイの小舎に金の貯藏しあるに目星を付け、ルイが川岸で仕事して居る間に密かに偵察した。ルイもビク／＼もので日夜銃に彈丸を込めて警戒して居つた。

或日、食糧が盡きたので「海坊主」は町の方へ下りて行つたが、久々で娑婆へ出て

來た爲めか、彼れの足は思はず停車場の方へ向いたのであつた。

今しも到着した列車の中から、立派な一紳士が降りて來た。其の紳士はルイを見るや傍に寄つて、

「これはルイ、ラムさんお久しぶりですな」

「私は貴君を知りませんが、會つた事はありません」と、腦を破壊した彼れは怪訝さうに答へて、直ぐ山の金の事を心配し出した。

「知らん？それちや後日必ずお知己になる時が來る」

其の紳士は笑ふた。これは他ならぬラヴェンガーである。

「海坊主」は何かブツ／＼云ふて村の方へ引返さうとした。其の時に又汽車が着いた。彼れはプラットホームの方へ踵を返した。列車からセヴァスチアンとレオンテインとが連れ立つて降りて來た。プラットホームに立つて居つたラヴェンガーは近寄つて、

「白人村へ御出でなすな」と、帽子を取った。
 「オ、貴君は何御用で此處へ居らつしやつたんで？」と、セヴァスチアンは意外の
 貌容である。

「貴君と同じく寶堀りに來たんです」と、ラヴェンガーは答へた。

セヴァスチアンは此の時、柱の影になつて居つた「海坊主」のルイを發見けて更に
 驚ろきを増した。愈々二人は何か謀し合せて此處へ來てゐるに違ひないと彼は思つ
 て荒々しくルイの傍に寄つた。

「どうした其の後は、ルイ」と、手を突き出した。

「貴君は一體誰れですか、私はお目にかゝつた事はありません」

腦を破壊した彼は忘れて仕舞つた。セヴァスチアンは彼れの村の方へ去るのを
 何時までもく怒めしさうに見送るのであつた。彼れが氣が付いて見返つた時に、
 ラヴェンガーはレオンティンを馬車に乗せてやる處であつた。

第三卷 自白書の行衛

山の小舎に歸つたルイは急いで金を隠して置いた處へ行つて見た、其の無事なる
 を見てホツと一息を吐いた。彼れの胸の中には色々不安の事が湧いた、殊に今日停
 車場で逢ふた二人は一體誰れであらう。彼れは窓から外を眺めた、満山の木も草も
 皆自分の黄金を盗みに來たのではないかと疑はれた、彼れは銃を把つて警戒するの
 であつた。彼れは黄金を抱いて不安に堪へなかつた、すると誰かの足音が過敏な彼
 れの耳に入つた。氣のせいではないかと自分の周囲を見廻した誰れも來たものではな
 い………が二つの光る眼が室の隅にあらはれた、そして其の下には蒼白い手が動い
 て居る。彼れは催眠術をかけられた人が施術者の意のままになる様に其の視線を恐
 ろしい眼に向けざるを得なかつた、彼れの半分破壊した腦に次の言葉が響いた。
 「チャリーカーゾンに殺人の罪を誣る彼れを無期徒刑に陥れたるセヴァスチア

ンと共謀したる汝の犯罪を明日に告白し之れを書け」

彼れは思はず身慄ひした、そして其の手は期せずして其の怪物が差出す鉛筆を握り紙の上に書くのであつた。

余はチャリカーゾンを破滅に陥れたる犯罪事件の共犯者なるを告白す……と、彼れの手は動いた彼れの本心が書いて居るのだ、そして彼れの空虚の醜骸は化石の如く椅子の上に腰掛けて居るのであつた。此の時、團を排して這入つて来たものがある、それはセヴァスチアンである。彼れは旅館にレオンティンとラヴェンガ―を残して一人「海坊主」の様子を見に来たのであつたが「海坊主」が何か書いて居る様子が怪しいので思はず立停つた。彼れは「海坊主」が書いたものが自分の犯罪事件の顛末であるを知つて腰を抜かさん許りに驚ろいたのである。彼れは猛然としてルイの肩を掴み床の上に投げ飛ばした。

「誰に教唆されてそんな事を書くのか貴様がそれを公表すれば罪を着るのは僕計り

ではないぞ。貴様も牢へぶち込まれるんだぞ」

「海坊主」は睡眠から醒めた様にセヴァスチアンを見上げた。

「お前は誰れだ何れが欲しいのか、私の黄金が欲しいのか」と、彼れは立上つて銃を取り上げた。セヴァスチアンは手元に飛び込んで銃を奪はうと争ふた。

「何の爲め又誰れに貴様は告白するのだ、貴様も僕も同罪ではないか。出て行け行かんとうつぞ」と、銃を掻き取つて「海坊主」は叫んだ。

「其の自白の書類をよこせ」と、セヴァスチアンは矢の様に机の方へ飛び込んで行つて書類はと見た、怪しむべし、其の自白書は何處へ行つたか影も形も見えぬのである。

「出て行け」と、「海坊主」は銃把で彼れを撲つた。

「自白書を渡せ」と、詰め寄つた。「海坊主」は銃の覗ひをセヴァスチアンの頭に向けた。仕方なく彼れはジリ／＼退いて遂に小舎の外に出されて仕舞つた。ルイは正

に阿修羅王の如く暴れ廻つた。小舎を逃れたセヴァスチアンは、ルイは誰れかと共謀になつてあんな自白書を書いたに違いない、共謀者は誰れだらう、ラヴェンガーに相違ない。それにしてもあの停車場でどうして私共の來るのを知つてラヴェンガーが待つて居たのであらう。誰れか密告する者があるんだ。密告者！密告者！妻のレオンテインではなからうか。

第四卷 兩虎の争ひ

勿論レオンテインの外にない……と、彼は獨りで決めた。結婚以來自分の意に従はぬのみか今も尙ほ暗に自分の不利益になる事を企て、居るとは何たる憎らしい女だらう「可愛さ餘つて憎さが百倍」とは此の事だ。よしそれならば厳しく詰問してやらねばならぬ、とホテルへ急いだ。一方「海坊主」は侵入者が全く去つた事を認めて安心したものが床に倚りかゝつて、銃を手にしたまゝ眠りに入るのであつた。

旅館に歸つて來たセヴァスチアンは室の廊下の處に思はず立停つた。室の中には妻のレオンテインとラヴェンガーが机にもたれてさも睦しさに話に耽つて居る。机の上のランプが一つの状袋を照して居る。彼等は戀に陥つて居るのであらうか、そして彼の女は既にチヤリーの事を忘れて仕舞つたのだらうか。そうすれば、そうすれば我者にするには却つて容易くなつて來た、いや／＼あの二人の話して居る様子から見ると單に舊友といふ位で戀中ではない、それにしても油斷のならぬは彼のラヴェンガーが遙々我々をこんな處まで追ふて來た譯が解らぬ、セヴァスチアンが窓越しに室の様子を窺つて居ると、レオンテインは机の上の状袋を手に執つて見た状袋の上には何も書いてない、且つ封もしてなかつた。レオンテインは不審相に「ラヴェンガーさん、これは貴君のものではなくつて？」

ラヴェンガーはそうでないと言つて首を振つた。レオンテインは中の書類を取り出して読み始めた。窓越しにセヴァスチアンは讀む事が出來た。

余はチャリカーズを破滅に陥れたる犯罪事件の共犯者なるを告白す……セヴァスチアンの顔は見る／＼蒼白に變じ脚はガタ／＼慄へ出した。山で「海坊主」が書いた謄寫だ、もうレオンテインの手にそれが入つて居るとは何と機敏な事だらう。秘密暴露の恐怖と兩人に對する憤怒はセヴァスチアンを驅つて室に闖入せしめた。

「其の手紙を私に渡せ」

セヴァスチアンが急に這入つて來たのに驚ろいたレオンテインは敏捷に紙を持つて居る手を背後にやつた。

「これは渡されません」と、きつぱり云ひ放つたセヴァスチアンは彼女に飛び掛つたけれども此の時はレオンテインは既にラヴェンガーに紙を渡した。

「どうぞこれを預つて置いて下さい」

セヴァスチアンは呆然として兩人の顔を見比べるのみであつた。状態に書類を入

れてラヴェンガーが立上つたのを見るや今度は彼れに詰め寄つた。

「其の書類を私に渡して下さい」

ラヴェンガーは返事もせずポケットにそれを入れるや靜かにレオンテインに「お休みなさい」の一語を残して立去らうとした。

「それは私のだ。私の大切な商賣上の書類だから是非渡して貰ひたい」

「しかし私はナヴァロ夫人(レオンテイン)から預つたものですから貴君に渡してよいといふまでは渡されません」

ラヴェンガーはこういふて自分の室へ去つた。セヴァスチアンはうらめしさうに彼れを見送り終るや妻の方へと向つた。レオンテインも亦彼れを睨み返した。

「あの自白書に書いてある事をレオンテインが皆見たらうか」と、懸念しながら彼の女の顔を読まふとしたけれども果さなかつた。彼れは心を決せるものゝ如く、ラヴェンガーの室を見掛け廊下を通つた。廊下に面した一つの室の中では勞働者のや

うな風をした人達が盛んに賭博をして居つた。中には酒を呷つて高聲に罵り合つて居る者もあつた。其の隣室がラヴェンガの室だ。今歸つた彼れは紙を手にして立つて居つた。

セヴァスチアンはづか／＼と這入つて

「其の紙を渡せ」と、要求した。ラヴェンガは黙つて相手の顔を見た。

「ねえラヴェンガさん、其の紙は私の大事な商賣上の書類なんで………實を云ふと私の古い同業者が私を瞞して金を奪つたんで、其の事が判ると私が恐かつたんです。すると其奴が謝るから、それでは其の一萬弗の金を返せば決して訴へないといふ事にしたんです、それが先方から取つた覺書きがそれなんです。つまり其の書類は私にとつて一萬弗の値があるんです。若し貴君が其の書類を渡せば私は引換へに一萬弗の金を拂ひます」と、セヴァスチアンは猫撫聲で説明した。

「それはお門違ひです。ナヴァル夫人にお願ひなさい」

とても其の手では駄目と見たかセヴァスチアンは猛虎の如くラヴェンガに飛びかゝつて其手紙を取らうとした。不意を喰つたラヴェンガは一時よろめいたが直ちに敵をねち伏せた。力こそ劣りたれセヴァスチアンも一生懸命である、彼れは下からラヴェンガの咽喉を目がけて締めつけた。兩虎一兎を争ふの光景が演出されたのである。

第五卷 火山の爆發

兩虎一兎を争ふ時は一虎斃れざれば已まぬ筈である。咽喉を締めんとしたラヴェンガが、右手を以つて敵手の顔に一撃を加へ、更に左手を以つて顎を撲つた。流石のセヴァスチアンもダチ／＼とよろけた。ラヴェンガが敵を倒して立上つた時突然壁に掛けてある額が落ちて來た。續いて机の上の花瓶が倒れる、更に椅子が轉げる。彼れは不思議さうに室を見廻した。丁度ダイナマイトの爆發が起きた様に烈

しい震動が室中の器具を轉倒させ、やがて、壁が落ち柱が折れた。旅館中の人々が叫び出して来た。窓から見ると流漆の様な暗の空に一道の火光が輝き、硫黄の臭ひが鼻を衝いて襲ふて来た。又も爆發が起ると、梁が落ち床が口を開けた。地震？地震！！恐るべき火山地震だ！！数分の後には旅館は倒壊して、裂けた材木は山となつて仕舞ふた。

地震の起つた時にレオンテインは自分の室に居つて思ひに耽つて居つた。此の針の筵の上に座つて居る事が出来やうか。再び夫の迫害に堪へ得る事が出来やうかと此の時、爆音が彼女の沈思を破つて、叫喚の聲が耳をつんざいた。天に沖する火柱が窓越しに見られた。彼女が逃げやうとした時に梁木が落ちて来て彼女を倒した。氣がついてみると幸ひに負傷はしなかつたが、二本の梁木の間に挟まれて身動きする事も出来なかつた。救ひを叫ぶ聲が諸處に起つて居る。空は暗澹として星影さへ

見えぬ。此の物凄しい光景の中にあつて、レオンテインは材木に挟まれながら静かに運命を待つた。

「レオンテイン！レオンテイン！」と、呼ぶ男の聲が此の時耳に入つた。ラヴェンガの聲であつた。彼女は又も救ひの神が来て自分の名を呼ぶのかと胸は怪しく轟ろくのであつた。彼れは女の聲を便りに探り寄つて助けた。

「怪我しない？」と、ラヴェンガは柔かに訊ねた。

闇に遮られて顔は見えねど、聲を聞いてレオンテインは涙の滲み出づるを禁じ得ない。悲喜交々の涙だ。

「いゝえ、貴君は？」と、訊き返すも漸くだ。

「大丈夫」と、云ひつゝ片腕でレオンテインを抱へて、

「材木に躓くと危いからこうやつてお連れ申ませう。道はよく判つて居ります。地震があつたのですよ」

ラヴェンガーは彼女を抱えて歩み出した。房々した髪の毛が彼の頬を撫でるのであつた。其の刹那、彼女は恍として夫セヴァスチアンの事を忘れた……なほチヤリーさへも。ラヴェンガーは漸く安全の場所に彼女を置いて、

「では、ここに待つて居らつしやい。私は貴女の御主人を尋ねて来ますから……」

ラヴェンガーが此の場を去ると、材木の上を乗り越えて一人の男が現はれた。

「赤鬼」と、綽名ある悪漢であるが、其の態度から見ると何かを探して居るのだ。彼れはセヴァスチアンがラヴェンガーと格闘して居る時に隣室で賭博して居つたのだが、音を聞きつけて室を覗いた。セヴァスチアンが書類を渡せば一萬弗拂ふと叫ぶ聲は慥かに此の悪漢の耳に入つた。そして其の書類なるものがラヴェンガーのポケットの中に仕舞はれた事は其の眼に入つた。其處へ地震が起つたのだが、不思議に此の「赤鬼」は怪我もせずに助かつた。彼れの今探して居るのは一萬弗の價値のあるらしい例の書類である。彼れは倒れて居る人達を物色したけれ共ラヴェンガーらし

い人もないので更に猫が鼠を待ち伏せする様に注意を怠らないで居つた。とうとう鼠が出て来た。ラヴェンガーがセヴァスチアンを小腕に抱えてやつて来た。彼れはセヴァスチアンを玄關に置いてホット一息した。レオンティンも傍に来た。人事不省から醒めたセヴァスチアンは唸り出した。

第六卷 急 潭 の 響

ラヴェンガーが身を屈めた時、ポケットから紙が落ちた「赤鬼」が紙を拾つて逃げ出した、それは例の自白書である。

「赤鬼」が紙を拾つて逃げ出したのを見たのはレオンティンであつた。

「紙を！紙を……盗んであそこへ逃げて行きます」と、レオンティンは「赤鬼」の逃げて行く方を指した、之を聞かぬや、ラヴェンガーは驚ろいてセヴァスチアンを玄關に残して悪漢の跡を追ふた。此の時月は雲を破つて下界を照し初めたので、行手

の方に去つて行く悪漢の姿はよく判つた。彼れは一萬弗の價値あると思つて居る書類を握つて礦區の方へ走つて行くのであつた。ラヴェンガの足が優つたか二人の間が漸く近くなつて來た悪漢はだん／＼追付かれさうなので氣が氣でない。今逃げ居る道は直角をなして鐵道線路が走つて居る其の上に溪川に架して居る一つの橋があつた。何分溪川の事であるから矢の様な急流で、水面から橋までは約四十尺の高さである。

「赤鬼」が此の橋まで逃れてくると大分追跡者が迫つて來た。彼れは何とかして此の橋を渡り向ふの林の中に隠れて仕舞ふとあせつたが、とてもそんな猶豫はなくなつて來た。橋を渡り切らぬ間に、とう／＼追付かれて仕舞つた。急流に架した橋の上での格闘は随分見物だ。ラヴェンガーは悪漢を突き飛ばした。

「赤鬼」は一時よろけたが直ちに回復して、一撃を敵の耳の下に加へた。ラヴェンガーが一寸攻撃を弛める間に「赤鬼」は身を躍らして急流に飛込んだ。氷の様な冷

たい河中に飛び込んだので彼れはブーツと氣を失ふたけれども、直ちに氣が付いて水面に浮んで出た。彼れは急流のまに／＼下の方へ流され行くのであつた。實に、「赤鬼」に取つては生命より金の方が貴いのだ。こう云ふ人間は世間に澤山ある流れ／＼て行く間に彼れの脚が砂についた。淺瀬に上げられたのだ。彼れが岸に上つて藪の中に身を隠した時には彼れの身體は綿の如く勞れて居つた。暫く休んで居る間に氣力がいくらか回復して來た。彼れはまだ麻痺して居る手をポケットに突つ込んで一萬弗の紙を出してみた。彼れは躍る胸を抑へて雲間を洩るゝ月影に透して見た。

「余はチャリ、カーゾンを破滅に陥れたる犯罪事件の共犯なる事を告白す……」
怪しげな読み方で最後まで讀んだけれ共、一百一萬弗の御利益もありさうにもないのだ。一萬弗は愚か鎧一文の値もないのだ、

「開けて口惜しき玉手箱」など、洒落れ處の話ではない。一つしかない生命を賭し

て紙屑を拾ふたのだ彼れは其の紙を掌で揉んで捨て様としたが、何と思ふたかボケツトの中へ捻込んで、イマ／＼しげに歩み出した。

「赤鬼」が、川へ飛び込むや、ラヴエンガーも直ぐ續いて橋から飛び下りた。此の時は「赤鬼」は既に流されて影形も見えなかつた。ラヴエンガーは岸に泳ぎ付いて悪漢の行衛を搜索した。けれども此の時彼れは既に藪の中に隠れて了まつた時だつた。

「此の急流の中に這入つては屹度野郎死んだに違ひない」と、獨り決めて橋を渡つて歸つた。

此の時地震は既に終へた。村人は彼方此方と馳せ違つて負傷者の救助に努めて居つた。幸にして旅館の人々は全部救ひ出された様子であつた。ラヴエンガーはレオンテインが先刻の玄關の所にションポリ立つて居るのを見て急いで近寄つた。レオンテインは堅く彼の手を握つて安否を問ふた。

「とう／＼野郎は川の中へ飛び込んで逃げて仕舞ひました」と、残念さうに。

「私が續いて飛び込んだ時には彼奴は既に押し流されて駄目でした。死骸が岸へ打上げられない以上貴女の大切な書類は手に戻らんか知れぬと思ふと誠に残念でたまりません」

「そんなに御心配なさらんでもよいですわ」と、レオンテインは言ふた。

「でも貴女に托されて居ながら、なくして仕まつては意氣地がない様で……」

「貴君は出来るだけの事を御盡しなされたではありませんか」

「マア、それもそうです」と、彼女の顔を凝視めて、

「最後には萬事とくになります」と、確信あるものゝ如く言ふた。彼女は。

「怪しな物」の

「總ての事、善果を結ぶべし」と、言ふ言葉を思ひ起してチヤリーの事を知らぬラヴエンガーが何故自分の胸中の煩悶を洞察してかく慰めて呉れるのかと奇異の思ひ

をした。此の時今まで倒れて居つたセヴァスチアンはムクムクと起き上つた。そして自分の舊悪が妻に悟られたのではないかと恐るゝ彼女の顔をみた。どの程度まで妻が悟つたか。知る由もない。

第五篇 魔窟の女王

第一卷 紙を持って一人芝居

「赤鬼」のフィンといふは千變萬化の悪漢で其の綽名もモンタナの賭博場で殺害した男の名を冒したものだ。彼れがラヴェンガーに追跡せられ、急流に身を投じて自分の小舎に歸つて来た時に、先づ衣服を着換へ、腹ごしらへをして一番近い停車場へと急ぐのであつた、汽車に乗つて彼れは、最早「赤鬼」ではなかつた。彼れは名も六年以前獨逸で用ゐた。ルードウキツヒ、ロマノフと改め米國東部へと乗り込んだのである。彼れの目指す所は何處か、言はずと知れた、セヴァスチアンの邸である。あの晩、ラヴェンガーと争ふた時、セヴァスチアンは書類と引換に一萬弗を渡

すと慥かに言ふて居た。其の書類は自分の掌中にある。物は當つて碎けるだと思ひつゝ、セヴァスチアンの門を潜つた。

加奈陀の白人村から歸つて来たセヴァスチアンは、色々の事で腦が混亂して居た。彼れはラヴェンガーと海坊主が共謀して自分の舊悪を暴き、レオンティンも之に加擔して居るものと考へた、彼女は果して自分の舊悪を知つて仕舞うたであらうかといふ事が彼れを最も苦しめた。さるにても、彼れの自白書は誰れかに盗まれてラヴェンガーの手にない。何處にあるだらうと思案して居る矢先き或朝一面識ない男が面會を求めに來た。

「では會ふ」と、給仕に言つて、彼れは應接すべく書齋へ獨り赴いた。

書齋で二人は話を始めた夫の態度の不審なので續いて來たレオンティンは此の有様を廊下で見居つた。

「ナヴァルさん、貴君の名のある自白書を私が持つて居るのですが………」と、彼

れはポケットから一通の書面を出してみせた、セヴァスチアンは漸く何氣ない態を装ふて、

「私の様な地位にあるものは兎角、脅喝を受けるものだ、君も其の書類で僕を脅迫に來たのなら、僕を、見損つたといふものだ。そんな事はビクともしないけれ共、君の様な人間と係累つて居るのも、大人氣ないから薩張り梟を付けやう。其の紙を渡せば百弗に買つてやる」

此の時レオンティンは、急に室へ這入つて來た。

「其の書類を一千弗に買ひ取つてやる」と、彼女は叫んだ、之を聞いたセヴァスチ

アンは、

「お前が出る幕じや無い」

「一千弗で買つてやる」と、レオンティンは再び叫んだ、ロマノフな微笑を浮べて

「大分糶上げるな、マア賣らずに納つて置くから」と、ポケットへ紙を入れて戸口

の方へ出かけた。
 「待て渡せばよし、渡さぬなら生かしては返さぬぞ！」と、セヴァスチアンは机からピストルを取出して突き付けた。

「赤鬼」は青くなつて、ポケットから書附を取り出したセヴァスチアンの顔には得意の色が浮んだ。「赤鬼」は書附を取出して、相手の隙を窺つた。ピストルを持つて居る手が一寸でも慄えたら飛びかゝらうと待ち構へた。不思議な事もあるものではないか。此の時突然、セヴァスチアンの手にせる、ピストルが何かに奪はれ、且つ顔でも撲られたかの様に彼れは室の隅によるめいた。誰がしたのか目に見えぬ。室の中には、自分とレオンテインとロマノフあるのみだ。セヴァスチアンは立直ろうとしたが、目に見えぬ力は彼れを掴み上げて投げ倒した、彼れは床の上へたばつて仕舞つた。レオンテインは、夫の倒れたのを見て恐怖した。彼女の恐怖は室の彼方に人の高さ位の處に現はれた二つの光る眼を見るに及んで喜びと變じた。自分の危

急をいつも救ふて呉れる不可思議な物だから。二つの怪しき眼と此の場の様とを見たらロマノフは氣も轉倒せん許りに愕いて、室を飛び出し外の壁に倚りかゝつてガタガタ歯の根も合はなかつた。彼れは命より大切な書附をポケットに仕舞ふとしたけれ共手が慄へて見當が付かない、漸くポケットの縁まで手が來たら、急に肘が折れた様になつて力が抜けた。真晝間の大道で一枚の紙を以つて狂氣の如く生命がけの一人芝居をして居るのは實に見物だつたらう、一人の巡査が通りかゝつて、驚ろきの眼を見張つた。

第二卷 弾丸は遂に飛んだ

彼れは一人で暴れ廻つた。目に見えぬ力と争ふて居るのだ彼れは空を打つた。うまく顔に當つたものらしい。と急に彼れの手は自由になつた。彼れが漸く書附を仕舞つた時に巡査は近寄つたがロマノフの紳士風なるを見て言葉を丁寧

「御病氣なんですか……」
 「目に見えぬ悪魔と戦つて居つたので」
 「もう大丈夫其の魔物は逃げたから、宅へ歸つてお眠みなさい」
 どこまでも狂人扱かひだ。

ロマノフは後を見送り、「恐ろしい力」が後を追ふて来やしないかと一目散に逃げ延びて辻自働車に乗つた時にホッと一息吐いたのである、一體何であつたらう超自然といふ事を信せぬ彼れには勿論神の仕業とは信じられない。自分の神経の一時の興奮に過ぎなかつたのだと獨りで断定して自分の愚を嗤ふのであつた。

「それにしてもセヴァスチアンが命にかけても書附を取らうとする所をみるとこれは想ふたよりも貴重なものに違ひない。一人の仕事には多過ぎる仲間を拵らへて成功してやらう」と、不敵な事を考へて居つた。彼れは車より下りて街より遠からぬ

とある大きな建物の前に来た。兩戸が閉じて誰も空屋としか思へぬ家だ、此の空家に接續して直ぐ此の市に有名な賭博場があつた。此の賭博場の主人はビアンカといふ妖婦で、其の前半生には恐るべき大罪惡が潜んで居つた、或富豪から大きな家屋敷を捲き上げた事もあるし。幾多の家庭を其の濃艶なる容姿の犠牲とした履歴もある。而して今は巨富を抱いて公然、賭博場を開設して居るけれ共、警察は一指之に染める事が出来ぬ所をみると、餘程怪腕を揮ふて居るに違ひない。彼女は宛然たる魔窟の女王である。ロマノフは此の賭博場の戸を叩いた。獰猛な番人が首を出して諾き乍ら彼れを奥に導いた。多数の人が丁よ半よと火花を散らして勝負してロマノフの這入つて来るのも氣付かずに居つた。ロマノフも一座の人が見識りの人許りなので別に氣にも留めなかつた、只一人彼れが見て膽を潰したものがあつた、それはラヴェンガーであつた。何時の間にあの男が此處に這入り込んだのだらう然しこうなつたら糞度胸を極め居るに限る、よし自分を見付た處で其の書付は河の中で失くし

て仕舞つたといつて仕舞へばそれ迄の話だ。彼れは暫時、勝負を見て居つた後此處を去つて廊下に出てカーテンの蔭に隠れたが其處に装置してあつた弾機仕掛に手を觸れると、驚ろくべし戸が明いた、彼れは中に這入つて元の通り戸を閉め拔足差足奥の方へと行つた、此の秘密室は巴里風の裝飾で善美を盡してあつた、一人の着飾つた女が二人の男と何やらヒソ／＼話をして居つた、ロマノフの這入つて來たのを見た一人の男は矢庭に突立つて之に向ふたが、其のロマノフなるを見るや、一寸會釋した。妖婦ビアンカも亦微笑して彼れを迎へた。

「随分久し振りでしたねー」

「全くです。しかし今度は大分面白さうな仕事がありましたので」と、彼れは彼女の美しくしさに恍惚とした眼で答へた。

「まあお掛けなさい。一體どんな甘い話なんです」

ロマノフは彼女の傍に腰を下した。そして嬉しさうな顔色で治まつて居るのであ

つた。ロマノフが、賭博室を去つて一分も経たぬ間に、ラヴエンガーは勝つた錢をポケットに入れて立上り、ロマノフの隠れた、カーテンの蔭の弾機仕掛の戸を明け中へ忍び這入つた。次の室の低い話聲が聞えて來る彼れが尙も靜かに進み入らうとした時に、自分の上衣の裾が戸に挟まれて居つたのに氣が付いて、それを取らうとした。運悪く戸がガタンと音して開いた。物音を聞き付けて來た一人の男は、ラヴエンガーの背後から腕を捕へた。

「貴様は此處で何をして居つたのか？」と、怒鳴りつゝ、ラヴエンガーの顔を覗き込んだが、どうしたのか吃驚して手を離し、一步退くやポケットから短銃を出して突き付けた、ラヴエンガーは手元に飛び込んで彼れの利腕を捕へた。其の刹那、轟然たる、音と共に彈丸は發射せられ、天井の壁に打込んだ。

第三卷 誰れが家だか

此の騒ぎを聞き付けて、妖婦ビアンカとロマノフともう一人の男もやつて来た。ビアンカが目配をしたので、男は争を止めて手を引た。ピストルは既にラヴェンガの掌中にあつた。

「まあそんな恐ろしい物を御離しなさい、私の宅ではそんなものは禁物なんですよ」と、笑顔で妖婦はラヴェンガに云つた。其の手は喰はぬと許りで笑つたまゝ、彼れはピストルを離さなかつた。

「まあそのピストルを御離しなさい。」と、重ねていふたが相變らず笑を浮べたまゝで離さない。

「お話ししたい事もありますから、何卒こちらへ入らつしやい」と、彼女は先に立つて行くので、ラヴェンガも之れに従つた。彼女は幕の蔭の綱を引いた。床に仕掛けてあつた窠し穴が口を開けて、ラヴェンガは、穴の中へ陥つて仕舞ふた窠穴が自動的に元の通り閉ぢると、妖婦は男達と顔を見合せて笑ひ乍ら、

「ほんに頓馬なお客さんだこと」と、ロマノフを顧みて、

「今の話の續きを聞かして頂戴な」

可愛想にレオンティンは此の頃の色々な出来事で益々病める胸に秘め難き思ひを繰り返すのであつた。夫セヴァスチアンの迫害をどうしたら免れる事が出来やうか世に何が不幸と云つても愛なき結婚程不幸な事が又あらうか、此の頃、セヴァスチアンは仇し女が出来た様子だ。何とかして此の機を利用して自由の體になり度いものだと思つた。或晩セヴァスチアンはレオンティンを芝居に誘ふた。

「妾今晚は氣分が悪から御免蒙ります」

勿論これはセヴァスチアンの豫期して居つた所だつた。彼れは匆惶として出掛け仕舞つた。獨り室に残つたレオンティンの眼に浮ぶものは戀しいチャリーの姿である。彼れは冤罪に依つて牢死した。自分は早く自由の身になつて彼れの冤を雪い

でやらなければならぬ。そうだ。それが彼れを眞に愛する途だ——と考へた。何を思ふたか、彼女は支度も早々劇場のある街の方へ行つて、向ふの店の戸の小蔭に身を忍ばせつゝ出て来る人々を窺ふのであつた。セヴァスチアンの這入つた劇場も閉場になつたのかそろ／＼人が出て來始めた。中にも目立つ一人の女が出て來た。左程美人ではないが何處となし人を引き付ける魅力をもつ多くの遊冶郎も惱殺されたらうと思はせる様な女であつた。其の女が自働車に乗つたと同時に、セヴァスチアンは一人の伴の男と出て來た。女は故意と手に持つた扇を落したセヴァスチアンはそれを拾ふて女に返した女はニツと笑ふて一寸會釋したが、其の時何か密に手渡した。紙片の様なものと、レオンティンは睨んだ。自働車は走り去つた。セヴァスチアンは、街燈の下で渡された紙片を読み終ると伴の男に、

「お休み」と、云ふて急いで歩み去つた。やがてセヴァスチアンは辻自働車を呼んで之に乗つた。追跡して來たレオンティンも直ぐ他の辻自働車に飛び乗つて、

「あの自働車の跡をつけて下さい」と、運轉手に命じた。運轉手はこんな事に慣れたもので直ぐに把手を動かした。レオンティンの乗つた自働車は間もなくピタリと止つて運轉手は窓の處に下りて來て、

「あの紳士はあの家へ這入つて參りました。あの戸の締つて居る家……」

「誰れの家だか知つてゝ？」

「ピアノカ夫人の宅ですア。だが奥さん顔を知らんと決して入れはしません。あれは市で一番流行る賭博場です」

彼れは心付けを運轉手に握らせて返した。

その時セヴァスチアンの姿は戸の中に消えた、暗にもしろき其の家は宏莊なる建物で、數階の石段が玄關の下にあつた。此の下段の下で、レオンティンは躊躇した這入つてセヴァスチアンに會ひ度いと云はうか、かく嚴重な賭博場である以上はそんな事は到底出來ない——と。其の時戸が開いて二人の男が石段を下りて來たが、

レオンテインの立つて居るのを見るや、不思議さうに女の顔を見入るのであつた。二人は行き過ぎ様としたが、一人の男は振り返つてレオンテインの傍に来た。

第四卷 故意と扇子を

傍へ寄つて来た一人の男は。

「奥さん何か御用なんですか、御用なら達して上げませう」と、帽子を脱つた。

「妾はピアンカ夫人の御宅へ伺ひ度いんですが」

「では二三度勝負をしたいと仰有るんでしやう」

「さうなんですけれ共未だ初めてなんですから」

「多分入れて呉れるでしやう。警察では女の探偵を寄越す氣遣はないのだから。兎に角私と一緒にいらつしやい」

其の男は、レオンテインを導いて、石段を上り戸を叩いた。黒奴の番人が顔を突

き出して見識りの人なので直ぐ入れて呉れた賭博室には多数の男女が今や勝負に夢中になつて居つたが、其の中に當のセヴァスチアンは居なかつた。レオンテインの顔は失望に曇つた。

「まだ外に室があつて？」と、彼女は例の男に尋ねた。

「いゝえ、此の室でも随分よい勝負がありますよ」其の時一人の青年が座を立つたので、レオンテインはその椅子にかけた、連れて来た男は傍に立つてみて居つた。

レオンテインは博奕の方法を知つてゐる筈はない。それに其の様子でみると、勝負が目的でなく、外に何かあるらしいと男は思つた。先に座を立つた立派な青年ですつかり勝負で負けて仕舞ふたらしかつた。彼れは煩悶に堪へぬものゝ如く入口の方へ行つたが、其の姿が見えるか見えぬうちに、一發の銃聲が響いてパツタリ倒れた自殺したのだ——室の中の人々は驚ろいて馳せて行つた。青年は尙ビストルを手にして、彈丸はこめかみに射込んだらしく彼れの顔には苦悶の波が漂ふて居つた。自

殺者を圍繞した人々の中に顔に見覚えの男が一人あつた。そうだいつか「歡樂閣」で會ふた「海坊主」とかいふ男だ。「海坊主」はオンレティンを見たけれども腦を破壊して仕舞つた彼れには一向舊知の人を知る術がなかつた。

「ビアンカ夫人はこんな事が隣りで起つたのを聞くと御機嫌でない」と「海坊主」は云ふた。

「何？隣り？」と、レオンティンは聞き糺した。

「直ぐ此のカーテンの蔭の室ですあ、あなたはまだ新米とみえますな」

此の時一人の黒奴は人を押し分けて來て、

「奥さん、どうぞ外へ出て下さい、さあ〜外へ出て下さい」

二三の婦人と共に此の光景を見て居つた、レオンティンは戸口の方へ押し出されようとした。折角こゝまで來て歸らねばならぬとは何と残念な事だらうと彼女は思ふた。此の時隣室に通ずる戸が開いて、自殺した死體がビアンカの室に運ばれる所

だつた。レオンティンは一計を案出して故意と其場に卒倒して仕舞ふた、人々の騒ぎは大變になつた。二人の雇人が彼女の倒れた傍に來て。

「さあ、此の女も一所に運んで行かう」と、云ひながら頭と脚とを釣り持ちして隣室の長椅子の上に置いた。彼れは細く目を明けて見た。案の定、セヴァスチアンは妖婦ビアンカとロマノフと共に自殺した死骸の傍に立つて居つた。レオンティンは急に立上つた。此の時のセヴァスチアンの驚ろきといふものは全く烈しかった。妖婦ビアンカも流石吃驚して近寄つた。レオンティンは妖婦の手に一葉の書附のあるを見るやセヴァスチアンの此の賭博場へ來た理由も解つた。

劇場の前で、セヴァスチアンが扇子を拾ふてやつた時にビアンカが手渡した紙には單に、

「若し或る書附を御所望に候はゞ妾にお續きお出で下され度候」と、書いてあつ

た丈なんだが、これで此の男を自分の宅に引付けるには充分であつた。セヴァスチ
アンがピアンカの家に行くと、彼れは戸口に迎へて、

「何卒こちらへお出で下さい」と、自分の室へ連れて来て長椅子に並んで腰を下し
た、妖婦は給仕の持つて来た茶を飲んで笑ましげに彼れを見た。彼れは案外の歓迎
で安心したものゝ如く、ハバナの葉巻を一本摘んで火を點けた。

「ナヴァルさん。實は一通の書付が妾の手に這入つたんですが、御所望なら何程御
拂ひ下さるでしょう」

第五卷 エ、五萬弗？

セヴァスチアンは平氣を装ふて、

「實は前にも其の書附を賣りに来た人があつたんで、私は百弗出さうといふたんで
す、別に大した書類でもありませんが面倒ですから五百弗なら買つてもよう御座い
り。」

「ます」

「妾は又五萬弗なら賣らうと思ひまして……………」

これはえらい事になつたとセヴァスチアンは慄え上つた五萬弗とは吹きも吹いた
り。

「奥さん、とても五萬弗では御相談致し兼ねます」

「五萬弗が一文飲けても妾の方も御相談出来ません」

セヴァスチアンは此の時案外手硬い女だと思つた。

「それでは一萬弗までなら出しますせう、これがギリ／＼結着の所です」

「まあ此の相談は止しませう」と、彼女は書附を仕舞つて立上つた。此の時である
一發の銃聲が響いて、自殺した死骸の運び入れられたのは。立上つたセヴァスチア
ンはロマノフと顔を見合せた。そしてセヴァスチアンは此の時ピアンカとロマノフ
が共謀者であるを悟つて瞞された憤怒と嫉妬とが一時に込み上げて来たので口も利

けなかつた。するとレオンティンが室に運ばれて来た。セヴァスチアンはレオンティンと立ち上つて「其の紙を妾にお渡しなさい」と、ビアンカに向つて叫んだ、時に顔は蒼白に變じた。ビアンカは一步退いて睨み付けた。怪むべし此の時目に見えざる不思議な力が、ビアンカの手から紙を奪ふと見る間にレオンティンの手に渡した妖婦ビアンカはそれを取り返さうとして飛びかゝつたけれ共不思議な力は彼女をよろめかせた。續いて一人の下男がレオンティンの腕をつかんだが、これも其の力の爲めに背後に倒された。

「其の女を逃がしてはならんぞ！其の紙を取り返せ」と、ビアンカは一生懸命だけれども、口惜しい裁體は動かなかつた。ロマノフも一大事と見て走り寄つたけれ共これも間もなく投げ倒された。ビアンカの乾兒は總立となつて彼女を捕へんとしたけれ共、見えぬ力は、片ツ端からバタ／＼投げ飛ばすのであつた。レオンティンは賭博室の所まで出て来た。茲に又難所がある。それは戸口に頑張つて居る張番の黒

奴だ幸ひにして二人の人達が今や歸る所であつたので夫れに交つて漸く虎口を逃了せた。彼女は一目散に街の方へ走つて。最早や大丈夫の所まで來ると街燈の光に其の書附の全文を読んで終はうと開いてみた。其の時一人の男が背後からやつて來た。

* * *

さて「海坊主」のルイは其の後如何したか。彼れは金礦の巨萬の成金となつた爲め、其の財産を提げて新生涯を開くべく紐育の都へとはやつて來た。然り新生涯だ彼れの其の醜惡なる前半生は「歡樂閣」の火事の夜棟木に頭を撲たれた時に葬り否忘れ去られたのだ。彼れは自ら富豪として世に立つに方つて何等舊惡に對する悔恨の情も起さなかつた。勿論半は夢中で書いた白白書などの事は露ほども覺えては居らなかつたのである。

第六卷 落花紛々

其の夜「海坊主」のルイは賭博場でレオンティンに話し掛けられたけれども、彼は脳を痛めて全然記憶を失した爲め以前會つた事のある事を忘れて居つた。自殺一件の爲め其の夜の勝負はそれで終る事が判然したので、ルイは名残惜しくもコートを着て外に出た。彼れが石段を下つて少し行くと、其處に一人の美しい女が何やら書附を街燈の下で見居つた、傍へ寄つて見ると其の女は先刻賭博場で話した女なので、彼れは半ば好奇心と半ば又何か儲かる種でないかといふ利慾からそつと背後から覗いて見た。それとも知らずレオンティンは意外の文句に心を奪はれて居るのであつた、彼女は始めて夫の罪惡を知つた。自分の愛を得る爲めに、弟、テイゴと共に謀し、惡漢にチャリーの贖證書まで作製せしめチャリーが探險の途に上るや、彼れの名譽を傷けんと計つた事、自分が其の罠に陥らんとして居る危機に船

火事で破船して歸つて来たチャリーが飛び込んで来た事。それから其の贖證書を奪ひ合ふ機にテイゴが鐵の文鎮で頭を撲つて死んだ事裁判官を買収して彼れを終身懲役の獄に陥れた。奸策等、彼女は讀み行く中に、夫の罪惡に對する憤怒の情はアリアリ其の顔に顯はるのであつた。何とさもしい夫の心事であらう。冤罪の爲めに永久の闇に葬り去られたチャリーは、死に至るまで世を呪ひ人を呪ふて居つた事である。あはれ、魂魄地に迷はれ、願はくは我が心事を照覽あれ。生命を賭しても此の書類を證據にアルゼンチンの高等裁判に訴へチャリーの冤を雪いでやらねばならぬ落花は枝に歸らず、覆水亦盆に盛る由も無い。いくら冤を雪いだとしてチャリーは此の世に歸つては來ない。しかし死んだとても罪なき身に汚名を着せられて居つては浮ばれぬだらう。彼女は新しい希望に活々として家路へ歩み出さうとした。骨ばつた手が突然肩越しに突き出して書類を奪つた。

「何をなさるので。それは妾のものです、御返しなさい」と彼女は狂氣の如く叫

んだ。

「あなたのものか知らんが、一寸見ると私の名が書いてあるので暫らく見せて頂きたいもので」

彼女はこれは容易ならぬ事が起きたと當惑したが此の際暴力を以てしては女の身の荒くれ男に勝てる筈は無い、これは一番計略を以て取り返すに如かずと考へた。

ルイは読み行く間にも只意外の感に打たるゝのみであつた。儘かに自分の署名のある自白書に違ひない。がさて何時こんなものを書いたらう。誰れが贋造したものだらう。それにしても若しこんなものが世間へ出たらこつちの身が危い、

「どうか、それを返して下さい」と、レオンティンは乞ふた海坊主は高く書附を上げて、

「よくも企みましたな。私を牢屋へ打込まうといふ計畫ですな」

レオンティンは言葉柔かに、

「まあお聴き下さい、貴君はよく其の自白書を御書き下さつた。チャリーカーソンは無實の罪で牢死しました。其の書附さえあれば罪を雪ぐ事が出来ます。どうか返して下さい」

此の時ルイは其の書附を二つに裂いた。レオンティンは飛び付いて取り返さうとした。

「その紙を御渡し下さらば一千弗差上げます」と、彼女は今は狂氣の如く迫つた。

「二千弗！それ位の金はピアンカの宅で一晩の内に費つて仕舞ふルイ様を知らないか」と、言ひ乍ら彼は二つに裂いた書附を更に細かく裂き切つて捨てた。風に吹かるゝ花瓣の如く紙片は散つた。レオンティンの希望も亦此の時ならぬ花瓣の如く散つたのである。

「己れを馬鹿と思ふか。一千弗で其の書附を渡して仕舞へば懲役に行かなけりやならん、そんな安いルイ様とルイ様が違ふぞ！」と、「海坊主」は捨臺詞を残して去つ

た。希望の光明を失ふた、レオンテインは冷たい石段に伏してさめくくと泣き沈むのであつた。

第六篇 超自然の力

第一卷 暗い穴倉の主

妖婦ピアンカと悪漢ロマノフとは一室で何やら語り合つて居る、

「セヴァスチアンはレオンテインに印度珠の頸飾を買つて遣りましたよ！」と、忠義顔にロマノフは報告した、

「ロマノフさん、今度から報告する時は妾の知らない事を聞かして下さい、ね、」
「中々機敏だと褒められやうと思つたのが當が全く外れて仕舞ふた、ピアンカは言葉を續け、

「ロマノフさん、貴方はロマノフでなくて「のろまふ」よ、そんな事はセヴァスチ

アンが呉れてから三十分と経たぬ内に妾は知つてゝよ、貴方許りが妾の配下と思つて？」

中々皮肉な言ひ方だ、言葉は尙ほ續いた、

「まあ妾の云ふ事を聞いて下さい、例の自白書ね、レオンティンは昔の情人の罪をそぐといふのであれを欲しがつて妾の手からうまく奪つて行つたでしょう、まあそんな自白書を酒飲ませられてか何かして書かせられた奴も馬鹿だけれども、レオンティンが奪つて行つた時に、見すく逃してやる宅の乾兒共は尙ほ馬鹿の骨頂さそうでせう、それを書いた人は兎に角、その書附を取り返して破つて仕舞ふたんですもの、こうなるとセヴァスチアンの身の上は安全になつたから今度は又妻君の愛を得やうといふので一生懸命ですわ」

妖婦は尙も語をつゞけ、

「そこで、第一着として印度珠の頸飾を買つてやつて御機嫌をとつた譯さ、その頸

飾といふのは金庫の中に保管つてあるのだが、附屬品は錠の下してない抽出しに入つて居つたので、彼家の下女のマリアンが一時間許り前に私の處へ持つて来て呉れたよ、それなのに今頃になつて貴方から御注進とはさてく機敏も怪しいものですね」と、毒づいて、今度は又油をかけた、

「ロマンフさん、氣にかけないで居て頂戴、貴君は妾の乾兒としては、頭のよい方よ、只男丈けに敏捷が足りないといふたまでの事ですよ、そこで、よい名譽回復の仕事がありますかね」

「何んな仕事？」

「外でもないその頸飾を今晚奪つて来て下さいな、手傳にレツテイーを連れて行つてよいわ妾がちゃんとして策戦を考へて居つたの」

「そこで、奥さん一つは注意して置きたい事は、あのラヴエンガの奴ですがね、彼奴を生かして置いては危険ですせ」

「おや／＼あんなもの貴君は怖くつて？」

「怖くなくつて。まあ考へて御覽なさい、白人村へ来て自白書を奪つたのも彼奴の仕事、それから此の隣りの室へ博奕に來たでしやう、それから此の秘密室へ忍んで來て私共の話をすつかり聽いて仕舞つたんです、中々顔に似合はん油断のならぬ奴ですせ」

「大丈夫、金の脇差、此の仕事が済む迄は穴倉から出さないで置けば」と、ピアノカは受合つて更に、

「それから短銃も／＼取り上げて仕舞つたし、シタバタしても何が出来たものか、それで仕事が済んだら明日釋放してやるさ。若し警察へ言つて監禁したと訴へても警察では狂人扱ひにする許りだ」

「私はまあ彼奴を片付けて仕舞つた方が賛成だ此の間の晩の騒ぎの時も、レオンテインに加勢して、私も撲られましたせ」

「そりあ、ラヴェンガーではありません、あの時はもう穴倉に落ちて室には居りませんでしたよ」と、ベルを押した、現はれて來たのは王李といふ支那人の下男だ。

「王李や、ラヴェンガーさんは何處に居る？」

「穴倉あります、奥しやん」

「入れられてからズーツと中に居るのかい」

「ちやんと入れてあります王李番人する、決して出られない」

「御覽なさい、ロマノフさん、皆んなあなたの神經よ、おや！」

「おや！」と、ロマノフも同じく叫んだ。

ピアノカの背後にあつた衝立の上から烟が漂ふて居る、下男は衝立を除けた、今しも噂して居つたラヴェンガーが椅子の上で悠々と葉巻煙草を吹かして居る、彼れはピアノカを見るや立上つて丁寧に會釋した。餘りの事に暫く誰れも言葉はなかつた、

「貴君はどうして此處へ来たのです」と、ピアンカは詰つた。

「王李さんの跡について来たまでです、失禮とは存じましたが聴くともなしに皆さまのお話をこゝですつかり拜聴致しました」

「殺つて仕舞へ！」と、ロマノフは立上つた。

「ま！、待つた！」と、ピアンカは制して、

「妾共の運の悪いのです、王李はそれにしても思ふたよりもボンヤリだな」

「奥しやんく、私ちやんと戸の錠下したあります」と、王李は不思議がつた、

「ラヴェンガーさん、今度は妾がよい所へ御案内致しませう」

ラヴェンガーは一揖して腕を差出した、そしてピアンカは目配せで王李を従へてラヴェンガーを階下に誘ふのであつた、ロマノフは腰を抜かさん許りに驚ろいて之を目送した。

更に又不思議な出来事が警察署で起つた。

「ケーシーといふ巡査が休憩時間に眠つて居つたが突然跳ね起きて、

「諸君！見給へ〜！」と、叫びながら室の隅を指した、室に在つた警官は皆其の方を見た、薄暗い隅に二つの輝く眼が顯はれて、其の下に白い手が動いて居る。

手は左の如く輝く文字を空間に書いた、

今晚、富豪セヴァスチアン、ナヴァル家に賊忍び入り印度寶玉の頸飾を盗み取るの計畫あり！

やがて文字は靜かに消え失せた、警官は其の場に走り寄つて見たけれども何の異状もなかつた中にもケーシー巡査の狼狽さ加減たらなかつた、壁に頭を打ち付けて瘤をこしらへた、彼れは其の瘤を擦りながら、

「署長に報告しやう」

「君はそれなら署長に話し給へ」

「僕獨りではいやだ、君等も來給へ」

巡查等は署長の所へ行つた、オー、シヤフニツシー署長は嚴めしい顔をして巡查をながめ、

「何を泡喰つちよるのか、寢呆けてるんじやらう。室へ歸つてもう少し休め！」

「署長殿！それは事實です、現に私も慥かに見ました」と、ローガンといふ部長は言ひ返した、

「おや／＼コーヘン巡查、君も見たのか」

「ハイ、慥かに見たのであります」と、上官の視線を避けながらコーヘン巡查はオヅ／＼答へた、署長は容を改め、

「では、命令を下す、諸君、四人はこれより直ちにナヴァル家の警戒にあたり、賊を捕縛する迄は歸署すべからず」

さあ。事だ。

第二卷 百年も二百年も

四人の巡查は警察自動車に打乗つて、ナヴァル家へと赴き警戒の任に就くのであつた。夜の十二時を過ぐる頃果して一怪漢が現はれた、それはビアンカの乾兒のレツデイーといふ奴で見張番の役になつて來たのだ、ロマノフは此の時に湯殿へ這入つて、外に立つて居るレツデイーに家の模様の判つた合圖をして居つた、此の家の下女が豫て牒し合せた如く、故意と窓を明け放つて置いたのだ。レオンティンはセヴァスチアンの侵入を恐れて、自分の居間の戸には鍵をかけ、いつも隣の寢室で眠る事さへも、彼れは探知して居つた彼れは足音のせぬやう靜かにレオンティンの居室の方へと忍び行くのであつた、レオンティンの寢室の戸は少し開いて居つた、ロマノフは耳を澄して、彼女の寢息で熟睡に陥つて居るを知り一度元の湯殿へ引返して、窓から直ぐ下の非常梯子の下に立つて居る、張番を見下した臆病だけれども

ロマノフは一生懸命だ、若し仕事がうまく行かなければ、ビアンカに破門されて口が乾上がるからだ、彼れは張番の慥かなのを見定めて、更に引返し突當りの戸を合鍵で開けて先づ逃げ路を作り、それからレオンテインの居間に侵入して、金庫の前まで行つた。彼れはシャツの袖口に書いて来た暗號に依つて金庫を開け始めた、これと同じ時刻であつたケーシー、コーヘン、ローガンの三巡査は、もう一人の巡査に自働車を預けて、手分けして此の場へやつて来た張番して居つたレッズテイーはケーシー巡査を認めて逃げ出したけれども、コーヘン巡査の爲めに苦もなく捕へられて自働車の方へ連れて行かれた。金庫を開いたロマノフは、中から頸飾の入つて居る寶石箱を取り出した、どつこいさうはいかぬと、デージー、ローガンの二巡査が這入つて来た。ロマノフは逃げ出して、レオンテインの寢室に飛び込んだ、レオンテインは物音に目を覺してたち上つた、彼れは行場を失つて窓硝子を破り庭へ飛び下りたが此の時既に二巡査の發射した一弾は彼れの上腿部を傷けて居つたのである

彼れは跛を引いて庭の彼方へ走つて屋根へ登り猿の様にそれを傳ひ、非常梯子から街へ下りた巡査の叫ぶ聲が庭の方に聞えた、傷から血潮が滴つて逃げ路が判つては大變と彼れが手巾を裂いて傷を縛帯し、辻自働車に飛び乗つて、ビアンカの宅へ歸つて来た時には、氣息奄々として居つた。

「我々の頸飾を奪る計書を知つて居るのはラヴェンガの外にはない」

「馬鹿お言ひでないよ、お前とレッズテイーが鈍馬やつたからさ」と、ビアンカは腹立たしげに言つた。

ロマノフは傷の痛みに苦しい體を起した、

「彼の野郎を閉じこめてから行違ひ許り起つて居る、野郎が黒幕になつて邪魔して居るに違ひない」

「自分の魯鈍を棚に上げて、ラヴェンガの細工だなんてそれじゃ、お前は此の道

で飯は食へないよ、マアすぐ出て行つて貰ひましよう」

ロマノフは狼狽して、

「奥さん、それは困ります、それでもあの野郎は生かして置いては爲めになりませんせ」

ビアンカはベルを押して例の王李を呼んだ。

「ラヴェンガーは穴倉に居るか」

「チャーインと居り升出る事出来なありません」

「ロマノフさん、一しよに来て頂戴な、一寸様子を見て来よう」

王李は先に立つた、ロマノフは跛を引きく、ビアンカと並んで穴倉の方へ行くのであつた、大戸の所迄来ると王李は大きな錠を外して精一杯の力で戸を引きあけ、三人は中へ進んだ。兩腕の上に頭を載せて眠つて居つたラヴェンガーは足音に目を覺まして、立上り一揮した。

「それ御覽、ロマノフさん」と、ビアンカは云つた、

「何、猫冠つて居るのですな」と、ラヴェンガーの顔を小氣味よげに見て、

「あんなにして居るけれども、どうかして警察へ密告したに違ひないんでさあ」

ラヴェンガーは静かにビアンカに對つて、

「じゃ、仕事は仕損つたんですね、それで私が密告したとお仰しやるんですな。此の穴の中へ這入つて居つて無線電信機を持つて居るでなし、又魔術を知つて居る譯でもなし、随分可笑しなお嫌疑を蒙るものですな」

「それにしても不思議だ、いや片付けるが一番安全だ」と、ロマノフは自分の説を固持した。

「お前の口出しする處ぢやない、出て行きなさい」と、ビアンカは荒々しくいふて王李の方に向ひ、

「王李や、ロマノフさんを連れて行つておやり。それから妾の居間でなく別な室で

休まして置きなさい」

ロマノフと王李が出て行つたのを見済したビアンカの顔から怒の相が消えて、滴るばかりの愛嬌が現はれたその可愛らしい盤の中には幾人の浮れ男を埋めた事であらう。彼れは其の魔力ある眼をラヴェンガーに注いで、彼れの傍に寄り添ふて座を占めた、

「あなたを此處に置き申す事を、どうか悪く思はないで下さい」

「悪く思ふ處か願くば百年も二百年も置いて下さい私は喜んで居ります、若し！」

と、云ひかけてラヴェンガーはビアンカを見た。

「解つて居ますわ」と、嬌態を振つて、

「伴侶さへあつたらと仰しやるんでせう」

ラヴェンガーは黙つて頷いた。

第三卷 弱きものよ汝の名は……

「まあ、可愛いお方！」と、彼女はラヴェンガーの髪を撫でた。ビアンカはラヴェンガーも亦世間普通の男だわい、とうとう掌中のもとなつて仕舞つたと思ふた。

「伴侶さえあればいつ迄も居たいとお仰るんでしやう、どんな伴侶が欲しいの」とビアンカは問ふた。

「あなたの様な美しい伴侶」と、来る所だがそうはいはなかつた。

「煙管とよい書物と酒一本！これを伴侶にしたいのです」

意外の事だ。自分は未だ曾てこんな侮辱を受けた事はないと、彼女はサツと顔を赤くした、

「貴君は今生命を助けられた事をお忘れになりましたの」と、詰つて。

「妾も又考へ直さねばなりません」

「それは貴女の御随意です」

ビアンカは拳を固めて睨んだが、ラヴェンガーが一向平氣なので益々怒つて、荒々しく上へ上つて自分の室へ這入つた、そんなに怒つて居つても穴牢の錠を卸す事を忘れはしなかつた。彼女は椅子に伏してヒステリ的に泣いた、今までこんな侮辱を蒙つた事はない、自分の美貌を以てしてはどんな石部堅吉でも籠絡する事が出来ると思ふて居た自負心が破壊されて仕舞つたのだ赤くなく彼女の顔は今度は土の如き色と變つた。

彼女は怒りの形相物凄く立上つて、ベルの方へ手を伸ばした。王李を呼んで、口マノフの殺害手段を聞かうといふのであらう。又しても室の彼方に二つの光る眼が現はれ、其の下に、白い手が出た。彼女は恐怖に戦きながら見るともなしに見て居ると、輝き渡る火の文字が顯はれた。

爾、ラヴェンガーの愛を獲んと欲せば唯一法あり。爾のよく識る如くセヴァス

チアンの罪惡に關する自白書は既に破棄せられたれば、更に彼れを籠絡して自白書を得よ。さらばラヴェンガーの心亦變るべし。

光の文字は揺めくと見る間に消えて、残るは元の壁のみだつた。此の時、曉の空を破つた光線が此の室へ射入した、彼女は更に檢めたけれども、何もない。壁にしつらへた棚の上の花瓶は嘲笑ふ如く立つて居つた。

彼女は慌しくベルを鳴らした。這入つて來たのは王李である。

「穴倉へ！」

王李は先に立ち、ビアンカは之に續いた。錠前を開けて這入つて見ると、ラヴェンガーは前の如く腕に頭を置いて、スヤ／＼と眠つて居つた。ハテ不思議な事だ。彼女は戦く脚を踏みしめて、階上へ急ぎ登るのであつた。

「レオンティンヤ」と、妻の室へ這入つて來たセヴァスチアンは呼びかけた。又始

まつたかと妻は見上げたけれども、夫の顔は割合に平和であつた。

「私はお前に相談があつて来た、これまで私は色々お前を苦しめた。誠に悪かつたと思ふて居るが過ぎた事は取り返しが付かぬ、只これからどうしたら二人が幸福な月日を送る事が出来やうかと思ふて……」

レオンテインは黙つて聞いて居る。

「マア手取早く話しやう。最初デルガド港でお前に會つた時、私はお前を愛した。處がお前には約束の人があつた、其の男が死んだのでお前は兎に角私を愛する様になる迄名義丈けの妻となつた。考へて見るとこれまでは自分では親切にした積りだけれども、行き届かぬ處があつたらうよ」

行き届かぬ所が常に壓迫を加へて居つたじやないか、彼れは言葉を續けて、
「そこで、相談といふのは、今迄の事はサラリと水に流し、これから新規時き直しとして、私はお前の愛を求めやうといふのだ」

レオンテインはキツと夫を見て、

「大事な事を貴君は忘れていらつしやる。妾の愛した人の名譽は贖證書の爲めにまだ汚されて居るんです」

「もう其の人は死んでるではないか」

「死んでも生きても關係はありません。彼れの名譽は回復しなければなりません。現にルイの自白書には貴君の名も書いてありました」

セヴァスチアンはギョツとした、どうして此の女はこう執拗のであらう。レオンテインは更に、

「貴君には不審な事が澤山あります、あなたはあの自白書を奪らうとしたではありませんか」

「自白書の文句は皆嘘だ。私の様な金持は常に破戸漢に付け狙はれて居るものだ。ルイの書いた自白書も私を脅して金を奪らうといふ魂膽からだ」

「ルイは大變な金持です。あなたから金を奪る必要はありません」
 「あの自白書は金山を掘り當てる以前に造つたものだ。ロマノフといふ悪漢がこつそりと賣りに來たのを見ても、脅迫が目的で偽造した事は知れて居るではないが。私をもつと氣の強い男だつたら訴へ出て、彼奴等を縛つて仕舞ふのだが、自分にはそれが出來ぬ……といふのはこれが裁判になると、證人としてお前も法廷に立たねばならぬ。自分の愛する妻が、盗人の辯護士に反問されるのなぞは到底僕としては堪えられぬ事だ」

第四卷 見慣れぬ男

成程一理はある、しかしレオンティンはセヴァスチアンをどうしても信じられぬ、チャリーの潔白な事は絶対の事實だと彼女は思つた。

セヴァスチアンは猫撫聲で、

「ね、レオンティンや。私は今が今私を信じて呉れとは決して云はぬ、けれどもお前は何時も私を見るとオゾ／＼して居るが、これから仲よい友達となつて、どうか二人の間に愛情の湧く機會がある様にしては呉れまいか。私の願と云ふのはこれだけだ」

……何事をか心に決したレオンティンはサツパリと、

「ようございます。これからなるべくそういふ風にしましやう」と、手を延べた。

セヴァスチアンは熱い唇をそれへ持つて行くのであつた。

「それではこれから自働車でブレーション、フキールドの郊外へ出掛けて、スミス茶屋で晝飯をやつて晩方宅へ歸つて來やうと思ふがお前も一しよに行くだらうね」

「行きます」と、レオンティンは答へた。

「三十分も経つたら出掛けやう。私は自働車を此處へ廻す様に電話をかけやう」と云つてセヴァスチアンは室を去つた。レオンティンは支度をして居る間、何だか自

分の心を裏切りする様で苦しかった。甘い蜜を持つ蜂は、鋭い針を匿して居る、セヴァスチアンの甘い言葉もそれだと思つた。セヴァスチアンとレオンティンが自動車で出掛けると、女中のマリアンは電話をビアンカへかけた、

其の時ビアンカはロマノフ及三人の外の乾兒と何事か密議を凝らして居つたが、ベルが鳴るので、受話器をとつて……耳に當て、話が終つてからロマノフに對ひ「よい機會が來た、彼奴等は今郊外のブレーン、フキールド街道の方へ出掛けてミス茶屋で晝飯を喫べるのださうだ。誰れかミス茶屋といふのを知つて居るの」「私が知つてます」と、ロマノフは云つた。

「それは、ラマポー山の頂上近い所の森林中にあつて何處から這入つても數哩はあります」

「それではお前達はレオンティンに知れない様にセヴァスチアンに會つて「海坊主」のルイが待つて居ると云へば仕方なく一しよに來るに違ひないからそうしたら自働

車にたゞき込んで、證書贋造事件の自白書を、かゝせなさい。そして此の前の自白書と違ひはないか、よく検めてね。ぬかつちや駄目だよ」

「一體何の用にするんですか、無理に書かせた自白書を彼奴が買ひ戻す譯はありません」と、ロマノフは訝つた。

「お前は妾の云ふ通りにすればそれでよろしい」と、いふビアンカの鶴の一聲でロマノフは立上つた。

「じや皆！行くんだぞ」

「自白書をとるまで歸つてはなりません」と、ビアンカは念を押した。彼等が出て行くのを見たビアンカは再び元の悄然たる姿に返つた。一文にもならぬ此の仕事も、只ラヴェンガの愛を獲んが爲めだと思ふと、毒婦でも矢張りそこは女だ何となく哀愁の身に迫るを禁じ得ないのであつた。彼女は迷信の深い女であつた。それであの輝く文字が書いた命令は、即ちこれ天の自分に教ゆる所のものなるを信じか

くは全力を濺いでセヴァスチアンより自白書を得る手段を講じたのである。セヴァスチアンが猫を冠ると誠に好人物に見ゆる、レオンティンが彼れの畏にはまらうとする事も一再ならずあつた、しかしそんな時はいつもチヤリーの事が念頭に浮んで来て彼女は斷乎としてセヴァスチアンを拒むのであつた、更に又彼女の心を繋ぐものは、ラヴェンガーである。不思議な人物だ。これ迄自分の危急を三度迄も救ふて呉れた。彼れは影の如く、幻の如く、セヴァスチアンと自分の間に立つて、片手で彼れを突きつけ、片手で自分を護るもの、如くである、そして其のラヴェンガーの背後にはいつも死んだチヤリーが隨いて居る様に思はれてならぬ！とスミス茶屋でセヴァスチアンと對座して居る時にレオンティンは胸に繰り返した、其の時見慣れぬ一人の男が這入つて来た、ヅカ／＼とセヴァスチアンの傍へ寄ると、

「失禮ですが貴郎はセヴァスチアン、ナヴァル氏ですか」

「何か御用で？」

第五卷 天から降つたか

「實はこの人が貴君に會ひたいと云ふので」と、一枚の紙片を出して渡した。セヴァスチアンは其の名を見ると青くなつた。いま／＼しげに其の紙を破つて捨て、レオンティンには一言なしに、帽子をとつて、其の男と一しよに出て行つた。

レオンティンは夫の去り行くのを不思議さうに見送つて居つたが、やがて今夫が裂いて捨てた紙片をテーブルの上で継ぎ合せて見ると「ルイ、ラム」と、書いてあつた。

ルイ！ルイ！慥かに聞いた事がある、歡樂閣で一寸會つたあの男に相違ない、特徴のある顔だ。そう／＼「海坊主」といふ綽名ある男だつた、成程海坊主の様な片目の方角違ひの方を睨んで居る男であつたと思ひ出した。其の後大切な自白書を妾の手から奪つて破つて仕舞ふたのもあの男だつた、こう思ふと彼れがセヴァスチア

ンに會ひに來たのも何か怪しい事があるに違ひないと思ひ付くと、彼女は直ぐ立上つて、茶屋を出た四邊を見るけれどもセヴァスチアンの姿は見えなかつた。只遠くの方で助けを呼ぶ、幽かな聲がした。徑を辿つて行くと、ジブシーの馬車の傍に一臺の自働車が停つて、其の側でセヴァスチアンは三人の男を相手に格闘して居つた。レオンテインは遠くから之を望見したのである。レオンテインの心は動いた。そして身の危険をも顧みず木の根、岩角に躓きながら現場指して急ぐのであつた。悪漢共はセヴァスチアンを引攪つて自働車に押込め此の山道からだん／＼山奥へ連れて行つた上、自白書を強いて書かせる積りであつた。セヴァスチアンは此の時既に事態容易ならずと感付いて居つた。幸にして、一本の倒れた樹が道に横はつて居つたので、自働車は一寸停つた、好機逸すべからずと、さてこそセヴァスチアンは飛び下りて救ひを呼んだのであつた。

「押し込めて仕舞へ！」

と、ロマノフは引組んで來た。セヴァスチアンは死物狂ひになつて「人殺し／＼」を連呼しつゝ、防戦して居つたレオンテインが丁度其の時駆け付けて來た。悪漢等は躊躇した。しかしロマノフは流石に背後からレオンテインに組付いて、傍にあつたジブシーの馬車に閉じ込めて外から銃を下して仕舞つた。

「とう／＼二人生捕かな」と、齒をむき出して笑つた。ロマノフの唇から此の言葉が出ない間に、彼れはラヴェンガーが簾からヌーと現はれて來たのを見た。石牢の中からどうして脱けて來たのだらう。ラヴェンガーはいきなり二人を投げ飛ばし更にロマノフが彼れの攻撃に僻易して居る間に、馬車の戸を開いて中へ飛び入りレオンテインを救ひ出さうとしたが、其のうちにロマノフは敏捷く外から銃を下した。ラヴェンガーはしまつたと中から戸を蹴つて見たけれども頑丈な樫に戸は壊す事が出来なかつた。此の混乱の間に、セヴァスチアンのみは逃れて仕舞つた。彼方の小山の上を駆けて行く姿を見た時にロマノフは齒がみして口惜しがつた。

「マア、二人生捕つたからよいとしよう」
「いや、當の本人を逃がして仕舞つたのだから、ビアンカ夫人はウンと怒るに違ひないぞ、これお歸つて言ひ譯を考へねばならん」と、乾兒の一人は鬱いだ。

「おやくとんだ事をしたぞ。折角押し込めたはよいがあそこに崖があるぞ」と、半丁許り先の方を指して、

「仕方がない、兎に角こうしてやらう」

これよりさき、レオンティンが馬車に閉ぢ込められるや彼は恐怖に氣も遠くなつた、ところへ一人の男が這入つて來たので見上げるとそれはラヴェンガーであつた、西部加奈陀の白人村に居ると許り思つて居たラヴェンガーがどうして此の人里難れたラマポトの山中に來合せて、妾の危い所を救ふて呉れるのか。若しや幻ではなからうか、と尙も眼を定めて視た。慥かにラヴェンガーだ。彼女の恐怖に襲はれ

て居るのを見てラヴェンガーは、

「恐ろしくはありませんよ」

ラヴェンガーは力を極めて戸を打壊さんとしたけれども及ばなかつた。

その内に馬車が動き出すのを二人は感付いた。

第六卷 馬車は崖を目がけて

悪漢共は奇抜にも亦残酷な事を始めた。それは山の斜面を利用して、馬車を崖へ突き落そうと云ふのだ。彼等は馬車の轆を取り外して、山の下方へ馬車を押しやるや、叢の中へ隠れて結果如何にと見て居つた。大概の小舎位ある大馬車は斜面を滑り出した。刻一刻と恐るべき運命に向つて進み行くのだ。何か途中に障害物があつて、一寸停つたけれども隋性はそれに打ち勝つて走り出した三十尺の斷崖の下には犬牙の如き岩が犠牲者の落ち來るのを待つて居る。馬車は勢よく崖の縁まで滑

走して来た。隠れて見て居つたロマノフは思はず會心の笑を洩らすのであつた。車體は崖の縁でユラ／＼揺いだ。蠟燭の火の絶ゆる前にユラ／＼と光る様のもので、やがて車體は見えなくなつた。馬車の中のラヴェンガーとレオンティンとは如何したか馬車が坂の中途まで来る内にラヴェンガーは事の普通ならぬを感じた。彼れは夢中で搜索した馬車の中は暗いからだ。彼れの手で觸れたものがある、一挺で鐵挺であつた。馬車は其の時一寸止る様に見えたが、又走り出した。彼れは金剛の力を双腕に籠めて戸を打つた。馬車の運命はもう數秒の内に迫つて居る。

彼れは又も鐵挺を打下した、大きな戸がバカンと開いた。戸は蝶番に引摺られて行つたが、やがて後の轍の下敷となつて、馬車は一寸もぢれるや崖の縁に傾いて停つた。ラヴェンガーは機を喰つて車外に投げ出されたが起き上つてみると彼れの眼下には恐るべき斷崖が展開して居つた。彼れは直ちに手を伸べてレオンティンの腕を掴んで引いた。一步誤れば身は粉碎されて仕舞ふのだ。二人は呼吸をはかつ

てレオンティンは飛び下りた。二人共崖の縁でよろ／＼としたが漸く立止つた。馬車はレオンティンの飛び下りる時力を失はれたので更に傾きつゝ谷底見がけて落ち込んだ、間一髪の危険を逃れた二人は顔を見合せて暫時は呆然として居つた。

「ア、此の人は眞にラヴェンガーさんであらうか。自分の腦に浮ぶ幻影ではなからうか」と、レオンティンは身の周囲を見廻した。

「さあ、ナヴァル夫人、御主人の處へ御連れ申しませう」と、疑問の人は手を差延べた。

實に戀程奇しきものはない。蛇の様な毒婦ビアンカも鳩の如き少女の昔に還つた彼れは今しラヴェンガーの姿を假寝の夢に見るのであつた。自働車の歸つて来たので夢は破れた。彼女は結果如何にと彼等を迎へた。ロマノフ始め乾兒共の顔は明らかに失敗を示して居る、さりとは意氣地なき者共よな。平素無駄飯を食はして飼つ

て置くのもこんな場合に役に立てる爲めではないか何の顔あつてオメ／＼歸つて来たか。頼み甲斐ない小僧奴等と戀に破れた彼女は毒舌を以て乾兒の意氣地なきを罵つた。

「それだから奥さん、私の言ふ通りにラヴェンガーを片付けて置けば、こんな事もないのに」と、ピアンカの心事を知らぬロマノフは泣言云ふた。

「大馬鹿！」と、ピアンカは言葉も荒々しく、

「お前達は皆んな寝呆て居るのだ第一そこへ來合せたといふのは風來の人間だらう、慥かにラヴェンガーです。此の黒い目で見たのだから間違ひはありません。残念の事には、際どい所でとう／＼馬車からレオンティンを救ひ出しました」

「寢言お云ひでないよ、穴倉に押し込めてあるものがどうしてそんな所へ出られるか。戯言も休み／＼お云ひ」

「それでは嘘だと仰有るんですな。よし論より證據だ穴倉へ行つて見ませう。ラヴ

エンガーは必ず居りません」

ピアンカはそれならばと、ベルを押して下男王李を呼んだ。

「ラヴェンガーは何處に居る？」

「奥ちやん、穴倉に居るあります」と、チャンコロは答へた。彼等は王李を先導として穴倉に下りて行つた。錠を外して這入ると、薄暗いベンチの上でラヴェンガーは腕枕して眠つて居つた。

「これは怪しい。ラヴェンガーは居るぞ、慥かに今日の午後ラマポー山のスミス茶屋附近に居つたのだがなあ」と、ロマノフは不思議がった。

「ハ、ハ、ハ」と、ラヴェンガーは笑つて、

「そんな所へ散歩に行ける様な身分だといいが手足も充分に延ばす事が出来やしない。所で奥さん、いつ休暇を貰はれませうか」

ピアンカは呆れてラヴェンガーの顔をマヂ／＼と見た。

第七篇 空の謎

第一卷 同乗して下さる?

妖婦ビアンカは思ふ所あつてかロマノフ始め乾兒等に穴倉を出て行く様に命じた穴ならば這入り度い位に思つて居つた彼等は蘇生の心地して上つて行つた。ビアンカは戸を締めてラヴェンガの傍に腰を下した。

「ね、ラヴェンガさん。貴君はどうして妾を愛して下さらないの？」

「愛せぬ所ではありません。私は監禁されて居つても貴女のお爲めをいつも考へて居ります。此間も……」

此の間も光る文字で命令を書いて呉れたといふのか——と彼女は吃驚して、

「貴君を口説くのもこれで二度目です。少しは何とか何とか……」と、彼女は涙ぐんだ。

ラヴェンガは點として一語も發しなかつた。ビアンカも亦黙つてラヴェンガを見返した。凡そ半分間程は二人共、互の心を讀まんと睨み合つた。ビアンカはとうとう負けて自分の居間に歸るや長椅子の上に倒れて、屈辱の苦悶に泣くのであつた、今まで男に振られた事は無かつたのにテヴェンガのみは一向自分にかまつてくれない。しかも彼に對する自分の戀は到底抑へ付ける事は出来ない。彼女は泣き腫らした顔を上げた、偶然視線は室の一隅に現はれたる「怪しき物」に投するのであつた。

「怪しき物」とは二つの爛々たる眼と、死人の様な蒼白い手だ、手は空間に動くように見えて、光る文字を書いた。

若し、ラヴェンガの愛を欲するならば、或人を破滅せしめたるセヴァスチア